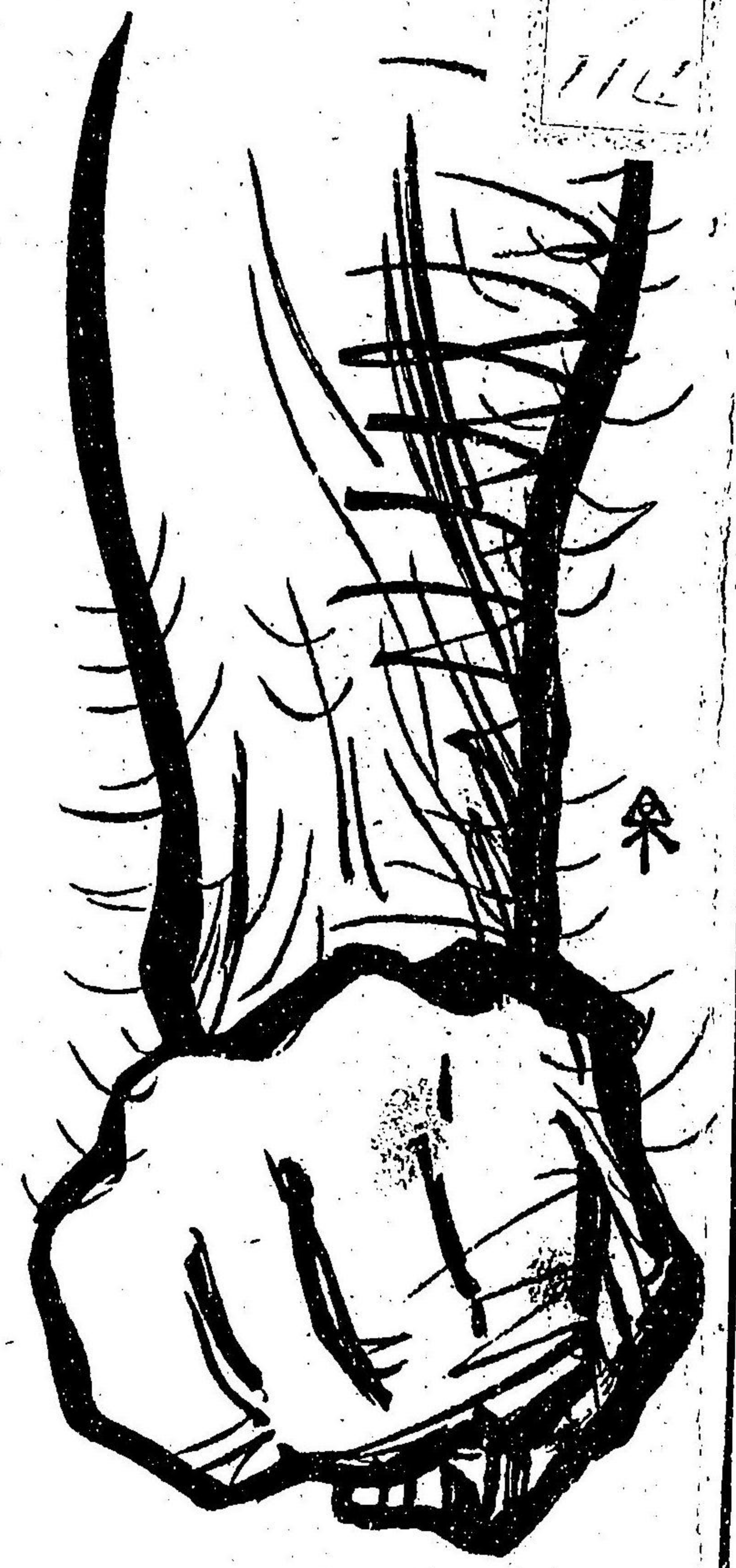


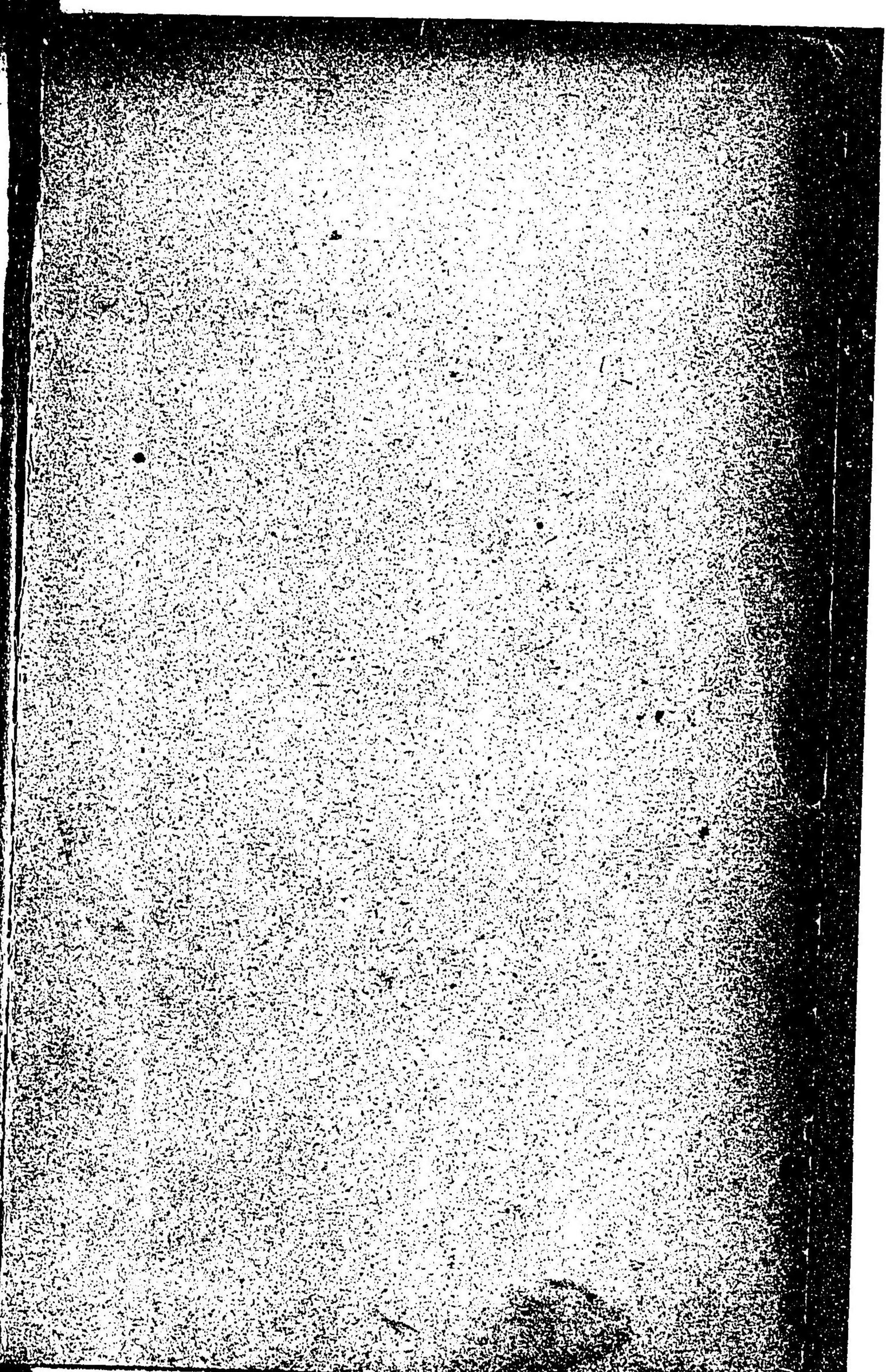
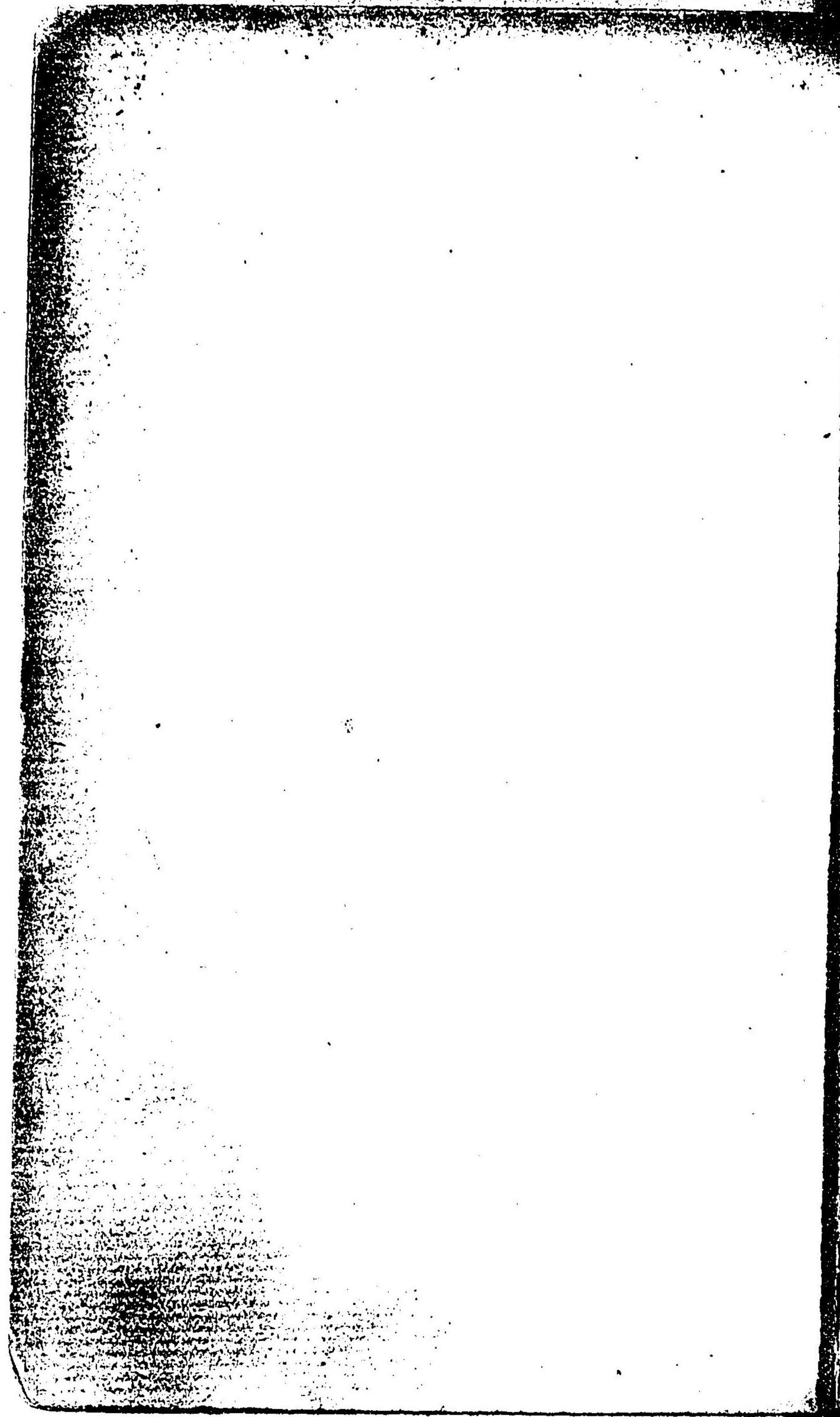
1332  
714

書生界之我男



著風潮岡河  
行發院書鄉本







書生界名物男

河岡潮風著

著者

寄贈本





## 旅行先より

一輛の汽鐘車は、よく、百輛の客車貨車を曳いて、千里の遠きに運ぶ。一人の英雄は、よく、億兆の民を導いて、萬代不易の境に置く。現今の日本帝國は多事多難の秋である、一年に人口が六十萬増すと云ふ様な事はかり喜んで居れる秋である。凡俗百萬の頭数を殖すより、國民が安心して曳かれて行く事の出来る汽鐘車の大人物一人を得る事をつとむべき時代である。シカシ老人先輩等の人は付すでに人生の三分の二以上を経過して仕舞つて、大抵エラさ加減が知れ切つて居る。この希望は寧ろ將來の未知數なる青年少年に脊負はすべきものであるとおもふ。

「吾に汝の國の青年を示せ吾よく汝の國の未來を卜せむ」と喝破した西洋の賢人の言葉は、其人逝いて數千年後の今日までも響いてゐる。青年は最も注目すべき一階級で、其の精華は學意にある人々——とりわけて、その輿論を代表する名物男にあ



るのだ。

名物男なき學生界は少しも活躍しない。學生を除ける青年は活氣なし。青年を認めずんば國家は亡ぶ。かう考へて見れば名物男は王冠の寶石の様なもので、實に珍重すべきものであると云ふ事が知れよう。

月のはじめ、著者金澤に入り、毎日近き各所の演説會に招かれ、現に多數の青年諸君に接しつゝあるが、天下は追々青年のものになりつゝありと云ふ事が、何となく考へられてならない。見よ今の青年が如何に元氣にして、如何に着實なる思想を抱き、如何に遠大の點に希望を置いてゐるか。日本は更に／＼に飛躍を用ひ得べき國民であると確信する。

元氣なる青年の中には、大人も耻づべき英才がある。十人に一人の傑物、百人に一人の名物男、それらの學生が計劃したる事が、如何に心地よく進行しつゝあるか。その如く汽罐車的人物の必要を感じた。

明治年間に現はれた色々の階級中、學生はあまり認められてゐなかつたが、今や漸く一勢力となつた、此上は百尺竿頭一步を進めて大いに名物男を尊重すべきである。書生界の名物男は、帝國元氣の淵源である。

本書は見らるゝ通り片々たる一小冊子だが、今日まで聞き溜め、書き溜めた學生界名物男の逸活奇行を録して、年若き諸君の徒然を慰めやうとするのである。内容は必ずしく悉く褒むべきものでないが、無邪氣で腕白な事は、天下一品たるべきをおもふ。もとより星董者流と同日の談ではない。

面白い哉。無邪氣は青年の旗じるしにして、腕白は少年の特權たり。諸君本書を讀みて、いさゝかにてもうなづく處あらば、益々自重自愛して、強烈に天賦の特色を發揮し、以て沈滞せる現代に一味の清涼劑を投せよ。而して汽罐車的偉人となりて、多事多難なる國家を安全なる域に運べ。

書生々々と輕蔑するな大臣參議ももと書生



天下百萬の書生諸君！諸君は英雄の卵也。乞ふ自愛せよ。本書發行につき、著者の希望は單にこれのみ。

四十四年六月八日 止午

加賀金澤市外西念温泉花屋にて

# 河岡潮風

## 書生界名物男目次

河岡潮風著

書生界名物男目次 (1)

體骨化身彌次將軍吉岡信敬	一
帝大法科の獨眼龍	一
統監を震撼せしめた豪傑書生	三
山岳會の秀才大學生	五
貴公子連の蠻カラ旅行	六
柔道快漢新井源水の猛男	七
天下を相手に相撲を取らんする痛快書生	七
弊衣破帽で百圓の買物	八



十五年間尻から一番の及第.....

奇談三幅對.....

悪僧釜うて物語.....

馬鹿をどりして禪を垂らした男.....

借馬に崇られた抜作君.....

自稱弘法大師の怪氣焔.....

汽船を泣かせた腕白の寺田.....

米の飯食ふ女に惚れぬ蠻骨漢.....

翠丸演説の効果.....

後藤新平幼時梨盜捧の事.....

鐵拳神聖論者の横行.....

雨敬を説破した奇才子.....

ハイカラ令嬢を罵倒して革命軍に入る.....

雄辨書生『黒象將軍』.....

狂熱書生松野兵衛クン.....

月下に不名物男を制裁するの記.....

藏原赤チョッキ君の甥の支那右衛門君.....

餓別の鐵槌がついで西藏に去りし福井一の名物男.....

一年間村はづれの社で柔道の獨習.....

蠻骨と磊落とを命とするヤン忠軒.....

悪戯俱樂部員活動珍話.....

困難を困難とせぬ豪快兒.....

不撓巖窟の苦學々生.....



小英雄の最後……………一八二

河底を歩いて渡らんとせし奇骨坊……………一九三

女子大學生を困らせた變物……………一九九

死を決して寒潮に投じた七高撰手……………二〇四

海陸軍の硬骨兄弟……………二〇八

森川町梁山泊の七人男……………二二三

膽力塾物語……………二二四

目 次 終

自動車上の隈伯と著者

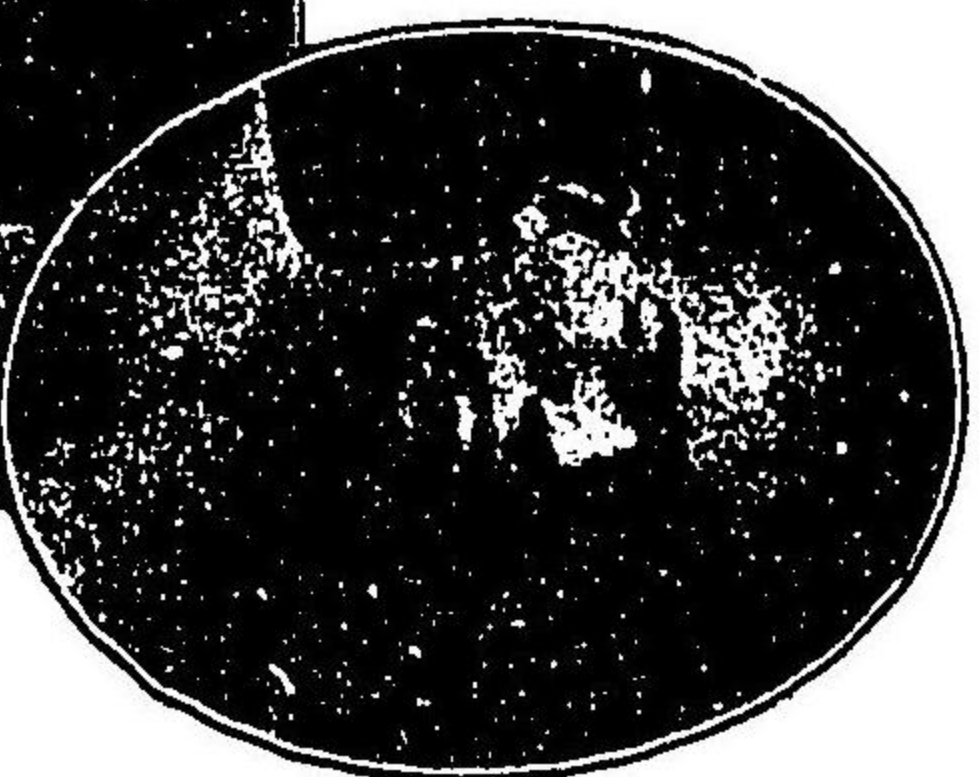


バア生潮  
ムルの風



君一崎宮。君雄解井大、リよ右てつ向) 人全泊山梁郷本  
(君耶二阿森。君一起村三。君均田芦。君耶四田寺。君六一澤大

河津彦四郎君



君吉豊瀬田





小英雄の最後……………一八二

河底を歩いて渡らんとせし奇骨坊……………一九三

女子大學生を困らせた變物……………一九九

死を決して寒潮に投じた七高撰手……………二〇八

海陸軍の硬骨兄弟……………二〇八

森川町梁山泊の七人男……………二二三

膽力塾物語……………二二五

目 次 終

自動車上の隈伯と著者



ア了生潮  
ムルの風



君一崎宮、君坂柳井大、リよ右でつ向) 人空泊山梁郷本  
(君郎二阿森、君一起村三、君均田彦、君頭四田幸、君六一澤大



河津彦四郎君



君吉豊淵田





# 生界名物男

河岡潮風著

## 化身 彌次將軍吉岡信敬

### ▲應援團の起源

冒險小説家はヨク痛快な男兒を主人公として、破天荒の冒險をさせる。シカシこゝんな痛快男兒はメツタにあるものでない。東京の學生十五萬と稱せざれば、  
 堇宗のハイカラ男か、奮勉強の青瓢箪、乃至は吹けば飛ぶ様な猪小才子の如き、  
 を割つたやうな性質の、洒々落々たる快漢は暁天の星の如しだ。と云へば、  
 でも無い。虎將吉岡將軍の如きは其の尤たる一人で御座る。

早慶野球試合を觀た諸君は恐らく御記憶であらう。群衆がもしライン

彌次將軍吉岡信敬

(1)



三三三書

生界名物男

河岡潮風著

蠻骨化身 彌次將軍吉岡信敬

▲應援團の起源

冒險小説家はヨク痛快な男兒を主人公として、破天荒の冒險をさせる。シカシこゝに痛快男兒はツタにあるものでない。東京の學生十五萬と稱せども、大抵は星童宗のハイカラ男か、蒸勉強の青瓢箪、乃至は吹けば飛ぶ様な猪小才子が多く、竹を割つたやうな性質の、洒々落々たる快漢は曉天の星の如しだ。と云つて全く無いでもない。虎髯吉岡將軍の如きは其の尤たる一人で御座る。

(1) 早慶野球仕合を觀た諸君は恐らく御記憶であらう。群衆がもしラインへ出てると

彌次將軍吉岡信敬



『おうい。引き込め〜』と、手ごろのバットを水車の如く振りまはして怒鳴ってくる軍人風の髯男ありし事を、眼は隼。聲は雷。彼を一度見ては忘れる事が出来ない。これぞ早稻田彌次團隊長、虎髯將軍吉岡信敬なのである。想ひ起す、再昨々年の秋、天高肥馬の好期に際し、天下の好球家の耳目を聳動したる、一大快事があつた！。

其れは何？申す迄も無く早慶野球仕合で、第一回は戸塚グラウンドでやつて四對一で、洋行がへりの鼻高々と威張つてゐた早稻田は脆ろくも挫かれた。第二回は三田で戦つたが、一對零と云ふ際どい勝負で、慶應は敗れた。かくの如くして勝敗相半ばし、結果如何と云ふ事は都門三日の談柄となつた。天下分目の仕合とて相方の意氣込凄まじく、大雨來らんとして風樓に滿つる底の大練習、戸塚も三田もグラウンドは夕暮の闇の襲ひ來るまで、球飛び、健兒奔ると云ふ有様、げに痛快な事であつた。

話頭は一轉するが、當時早稻田大學寄宿舎に吉田淳なる策士がゐた——。(彼れ今は二六新聞外交部主任)、同室には橋静二(今は早稻田大學より洋行)と云ふ、センセーショナルな運動狂あり、二人ひそかに相談して、寄宿が中心となつて選手を御馳走する事とし、舎生の巾着を絞つて十三圓何錢を得、林檎、玉子、平野水を寄贈した、尙ほ當日は一同一所に坐を占め、聲を張り上げて聲援をしやうと決議した。

是をほのかに聞き込んだのは運動部長の安部磯雄氏で、諸君が其の志ならば好いものがある。先頃野球團渡米の砌、シャトル在留の邦人が應援の爲に振つた旗で、カレヂェルと稱する一種の懸け聲と共に、敵膽を奪ふのだと云つた。それは願ふ所と委員が、安部氏宅の押入から、引つ張り出してきたのは三角の小旗、海老茶色の羽二重にW、Uの二字を白く抜いたるもの一百五十本、そこでカレヂェルの練習を始めたのだが、選手を一人教師としておこして呉れと申込んだ所、時のキャプテン押川清が、選手は急がしきにより此人を推す、よろしく頼むと附け狀してよこしたの



が、本題の主人公、吉岡信敬、押川の紹介状を握つて寄宿の裏門から、ノツソリ誰か居ないかエと髯面を出したのであつた。

▲虎髯初めて活動す

此後の事、多くは云ふまい。然し、略さんと欲しても略し得ぬのは、決戦當日の光景だテ。

奇快なる髯男。小氣味よい世話役として、虎髯將軍なる尊稱は此折奉られたのだ。色氣も艶氣も飾り氣もない、磊落なる事木の股から生れたる如き彼れの行動は、妙に若い舍生を引つける力を持つて居た。

決戦の當日、二萬餘坪の戸塚ヶ岡は人の山と化し去り、双方共によく攻めよく守り、観て居ても方の疑るマツチとなつた其折、一角に陣ざりし慶應の一隊、黒い上衣をハネ除くれば、下には白いシャツ。大書してK Oの文字!! スワヤと敵味方共に眼を見はつた時、突如! 虎髯將軍、スツクと立つた。漆黒なる虎髯、モジャつける

中に彼の紅唇動いて、一聲高く。

「用—意!!」

満を持して放たず、旗を捲きて眠れる如かりし彌次團は立てり。

一齋に旗ふりかざし、打ち振りつゝ、呼はる聲々。

「フレ—、フレ—、フレ—、ワセダ」と、彌次叫んで、慶應選手駭き、應援隊色を失す。

あゝ此聲! 此聲が日本に於ける彌次の擧げたる聲の最初のもので、此聲によつて勝利は早稻田に歸したのであつた。

▲三南三の傑

此のマツチに於ける將軍の功はまことに金鷄勳章に價するものだった。話を進める前に先づ彼の生ひ立ちを語らしめよ。

虎髯將軍は長州萩の産だ、父は宮内省の官吏、其子にコンナのが飛び出したから



面白い。しかも誕生は明治十八年の二百十日の眞最中とはあくまで奇抜でないか。幼より始末におへぬダ、ツ兒、神童ならぬ頑童の聞ね高く、『信ちゃん』の名は小供中間に一種のオーソリターを持つて居た。長じて早稻田中學に入り、山脇選手と同じく學んだものであつた彼は同級の花澤、三木の三人と共に三傑として權をふるひ、自稱して三商の三傑と云つた。蓋し彼は當時三年の南組にゐたからである。月日の立つのは早いものだ、三傑先生も進級に進級をかさねてる内に卒業した。三木は、大阪の商店に入る。花澤は千葉縣にかへつて理相的農村を造ると云ふ。彼は兼ねてより一高の蠻カラにして時流に超越せるを知るものから、ごうかして入りたいと、ガラにもない二部を志願したが將軍、ごう作戦の錯誤を來したが知らぬが、入學試験の難關で美ん事際退せられた。然し不撓不屈の精神は是に懲りず退いて力を養ひ、翌年再逆び襲したが復もや、返り討ち駄目!!

こゝに於てか將軍憤怒する事斜ならず、

「何入れて呉れぬば入つてやらぬ」とタンカを切つたが、夫れでも未練があると見れ、早稻田高等豫備校に入り、落武者共と机をならべて、AプラスBを繰りかへし、「エ、つまらぬ〜」と長大息之を久しうして、籠鳥の碧空を戀ふる如く、校舎の窓から青雲を望むで居た。

▲残るは髭一つ

此頃より彼は髭髯を蓄へ初めた。蓋し權威を保たんが爲であらう。或日の事。晝寝の夢から覺めて散歩に出れば、行人皆な彼の面を顧りみてクスリ〜笑ふ。奴ら乃公の美髯を嫉んでゐるんだなと自惚れつゝ家にかへれば、入口で兄貴にあつた。兄は矢張宮内省の官史なのだ。

「オイ信敬。其の面を見い」と云ふ。鏡で見れば是はしたり。右の方の髭は消えて跡なく残るはたつた髭一つ。おや〜おやと驚く彼を尻目にかけて、貴様は高等學校へも入れぬ半人前のくせに、生意氣に髭なんか生やすから半分にしてやつたのだ



と罵倒した。是には先生閉口して當分は無髭無髯。

「あゝ鼻の下が寒いなあ!!」

▲將軍武勇談

虎髯將軍には武勇談多し、負けたものもある。勝つたものもある。今各々一つづつを話さう。

月なく星しげき夜であつた。將軍は友人の宅を辭して小石川若荷谷へと差しかつた。突如!覆面の怪漢五六、暗中より飛び出し、物をも云はず、ボカリ／＼となぐり始めた。普通人なら、助けを呼ぶ所なれど、もとより剛氣の將軍、何で凹むべき、汝、何者ぞ無禮なりと、拳を振つてわたり合つたが、敵の手は十本以上こちらに僅か二本の腕、三分どたゝぬ間に頭は瘤だらけ、畜生こゝなるからはヤケ糞だ。片つ端から蹴殺してくれむすと、虎髯逆立て、奮迅の勢ひ、やつと暴徒を退け、もよりの交番へ訴へ出た所、查公彼を見あげ見おろして徐ろに曰く

「小石川には張り倒しと云つて、支那人を張り倒して物を奪ふ惡漢がある。君は其れと間違へられたのだらうよ」と冷然として取りおはぬ。將軍怒つて夫れからは支那人と誤認せられぬやうに、肩を登かして歩く事とした。

今一つの話は信州駒ヶ嶽に理科大學生と一緒に旅行した日の事だ。一天俄に掻き曇り、長風一陣ザートと天より落ち來ると共に怪鳥あり、ギャつと呼んで眼の前を過ぎるを將軍猿臂を伸してツカむだが、鳥の勢凄じく怪鳥もろ共谷間へ落ちた、それでも放さずとろ／＼握り殺して仕舞つた。見れば、鳥に似て獸の如き奇怪鳥。確に是は雷鳥なりと理科大學生は語る。其れならば珍重すべしと携へ、歸途についたが、たまたま上田中學の一教師と落合ひ、教師が強いて呉れと云ふから與へたこの事だ。彼曰くウンと思は、行つて見給へ、上田中學理科標本室の貴重物品箱の中に、

「一、雷鳥、駒ヶ嶽にて捕獲、吉岡信敬氏寄贈」と札が懸つて、例の雷鳥の剝製が



安置してある云々。何だか眉毛に唾の話だが、本人頗る裏面目で、ある酒席で話つた時には捕獲の一段に及び、身振りが過ぎて徳利を倒した事があつた。何しても痛快な事ぢや。

▲彌次教授として聘せらる

世にも奇怪なるは彼の彌次論である。彼の稱ふる所によれば彌次は競技の花で而して日本魂の精髓だそうた。一つの國に軍備なくば其の國衰ふるが如く、一野球團より彌次を除き去らば勝利はおぼつかない。三十八年度の第三回早慶仕合や三十九年度の第二回早慶仕合に早稲田の勝つたのは、ひとへに彌次の功だと極言して居る。イヤ口で言ふばかりでなく是を文に章して雑誌新古文林へ出した。こゝに於てか彼の彌次説は天下の眼に觸れたと見ゆ、四十年の春に至り群馬縣太田中學から、禮を厚うし辭を低くして遙々彼を招聘しに來た、初めの中こそ虎髯將軍、頑として動かななんだが、再三の申込み、マサカ孔明を氣取るでもあるまいと、出馬して第一

章彌次總論より、彌次法別記、彌次團虎の巻まで、悉皆コツキリ傳授して、美ン事彌次博士となりすまし、太田中學が他の中學との野球仕合の時の如き、親しく、太田中學軍を引卒して出場し、黒幕から絲を引つ張つて彌次大に努め、六對零しかもアルファ附きの勝を占めて、彼の所説を具體的に證明した。

▲黒い糞赤い顔

右様の次第であるから將軍が彼の地でモテた事夥しく、今日も明日も招待會や歓迎會。肉は山の如く、酒は泉の如し、下地は好なり、御意はよし、食ふ程に、飲む程に、流石の將軍も目茶苦茶に酔つた。ある夜更けて、彼は便意を催したまふ、便所へ飛び込むで用を足し、寝込むで仕舞つた。翌朝、未明、其の宿の奥さんが行つて見ると、小便所の板の間に糞山の如く、小便川の如きを發見し大騒ぎになつた。是蓋し前夜將軍が酔つたあまり、所を間違へてやつたので、酔さめの寐とぼけ眼こそすらく降りてきた彼は、堆かき黒い糞を見ては流石に赤くなつたとやら。歸



京後直ちに書を與さんに飛ばして、「御地滞在中は大變な御世話に相成り。」と陳謝したさうだ。大變の二字何と妙ではないか。

▲質流れの古洋服

將軍が大田中學滞在は約一週間であつたが、其の歸らんとするや、中學有志は菓子料として別に金三圓を贈つた。將軍も其の志を多として喜んで納め、早速やつて来たのは早稻田大學寄宿舎の彌次隊幹事、橋の部屋である「オイ、橋、風呂敷の猛獐に大きい奴を借せ。」と將軍ドナる。何をするのかと問へども答へず、たい大きな風呂敷と云ふ。仕方がないから、蒲團を包むやうな大風呂敷を借してやると將軍は例のテツペンに穴のあいた麥莖帽を座にホウリつけて飛び出した。物の五分もすると、セイセイ息せいて歸へつて来たが、横脇に抱いたる大包を擴げれば、現はれ出でたる一着の古洋服、將軍手ばやく着込んで、机の上の鏡おつとり、「どうた似合ふだらう？ エッ、エッ」と返辭を請求する。似あふも絲瓜もあるものか、肩の所に

繼が當つてる、其上少し短かいと見へ、衣肝に至り、袖腕に至るのツンツル。テンの古洋服。一體全體どうした事だと尋ねれば、何、例の三圓で、質流れを沾つたこの事に、大笑ひになつた。此洋服、今でも彼は着て威張つて居る。

▲大學入學赤いヘルメット帽

將軍自ら金を出して衣類を買つたのは古服の外にたゞ一回、巴屋の靴を買つた

いけど、是を語る前に彼の大學入學を述べねばならぬ。彼は不幸にして高等學校へ入りそこねた事は前に云つた通りだが、彼も此の關門は難功不落に近いと見てとつたので四十年一月、安部氏の紹介で早稻田大學の商科の豫科に入つた、此の髯男が商人になつたら變テコのもが出来やうが、將軍自身は大得意で、入學願書を呉れろと事務所で、ドナツテ小膽なる事務員を震駭させたなどの逸話も残つて居る大學生となつては古服の外に靴をハカねばならぬと思つた折もよし巴屋が月賦で靴を賣出した。ソコデ、乃公に安く賣れば、早稻田七千の



兒に、巴屋靴のハキ心地の良さを教へてやるなんかと駄法螺を吹いて立派な奴を調したのであつた。

已に洋服と靴とが出来た此上は帽子だ。懇意な學習院の坊ちやまから分捕つてもいいが少なくて仕方がない。ハテ困つたと思つたが、或日散歩してると、ハイカラな年少紳士が近いて来て、

「貴方は吉岡さんですな。」

「ハアそうです。」

ジャ、失禮です。是を進呈しませう、「取り出したのは赤い布片の捲いたヘルメット帽だ、此紳士は早稻田出身で上海の會社員であると告げ、是は同地の巡査の制帽だが、有名な君に進呈すると云つた。虎髯先生もコウ聞いてはうれしい。猫撫聲を出して禮を述べ頂戴に及んだが、まだ着ない。今に早慶マツチが復舊せられた曉には、是を戴いて、指揮を取るとやら、此點のみにてもどうか、早慶仕合が再び行はるゝ

やうにしたいものだ。

▲殿の及第 彼の前途多望なり

痛快男兒虎髯將軍は、奇行のあるだけを盡す内に進級試験が来た。流石の呑氣男も氣焔も吐かずノートブックと首引してやるやうだつたが、成績が發表せられて見ると、驚いたりな尻から一番!! 然し將軍は平然として

「事務員に憎まれてるからさ。」と少しも心に留めぬ様子だ、傳聞する所によれば其夜某選手の宅で痛飲した砌、虎髯を撫して、「頭から一番になる位は、死ぬ氣で勉めすれば譯はなからう。シカシ尻から一番にならうと思つても仲々なれるものでは無い。其の六ヶ敷いものになつたのだから光榮ぢや」と叫んだとが、彼の面目此の一語に躍如たりだ。

▲吉岡的イングリツシユ

大學部となつた將軍は益々特性を發揮しつゝある。英語なども徹頭徹尾、吉岡的



インクリッシユで、つねに凡人を驚かす。

かつて某對外の野球試合の日、彼我選手の寫眞を撮らうとて用意全く成り將軍を呼びに行つたが、一寸思ふ様な言葉が出ない無暗矢鱈に毛唐の袖を曳いて、

「ブリーズ、カム。ホトグラフ。ホトグラフ！」と。夫れでも美事に意味が通じた。

だもんだから、乗り氣になつて——でもあるまいが、或時、早大に來た 印度人を連れて、學校を案内してあるいた。あの建物が政治料で、是が文學科……と次第に説明した未、今度は理科と云はうとしたが、字を知らぬ。エ、儘よと、

「イツト、イズ、サイエンス、デバートメント！」と云ひ放つた。印度人大に魂消て、歐米各國の大學にすらない科學科のあるは、流石に 伯 オークマの經營する早稻田大學ちやと、馬鹿に感心したとやら、怪我の功名。將軍虎髯を撫して益々大得意!!

▲猛怪漢母に至孝也

かくの如く彼は放膽無邪氣の様であるが、決して猪武者的の野蕪でない。四十

一年八月、博文館の雜誌冒險世界が、空前の壯舉たるテント旅行運動會を閉じた砌、詳細の劃作を建てたのは彼れであつた。當時同行の石橋思案氏は「吉岡君は蠻勇ばかりでないよ。得がたい大才子だ！」と叫んだ。然り彼は單純ばかりの男でない。

彼はまた一人の母君に仕へて、至孝であつた。母君は彼にとつて、世界中の唯一の權威であつた。言、母君の事に及ぶや、つねに肅然として襟を正してゐた。

然るを無常の風は四十二年秋、病葉のほろくと散る夕ぐれ、母君をさへ誘ふて去つたのである。將軍の悲嘆夫れ何幾ぞ。

男兒吉岡信敬、生れて始めて泣いた。人生誰か死なからむや。親が子に先つて死ぬるは自然の數である。が、無殘は兒の名を成すを見るに及ばずして死んだ事だ。

將軍の突したのも又たこゝにあつたに違ひない。將軍が運動會の將軍より進んで、事業界の將軍となり、天下のビジネスメンの牛耳を取り、自動車に乗りまはる様になつてから、母君が逝かれたならば、まだ慰めるすべもあつたらうに！重ね／＼同



情にたねぬ次第である、かくて月日は音もなく流れた。

斗柄一轉して世は四十四年の新曙光を迎へ。虎鬚將軍 又た一つ齡を重ねた。彼のマラソン競走見物に行つて以來は怪氣熾もなく、黙々として登校しつゝある。然らば彼は活氣を失せりや？ 否々。鳥の飛ばんとするや先づ羽を收む。彼又た今此の時期にあるのだ。運動のシーズンは来りつゝあり。將軍は其の計画中なのだ。洩すべからざる天機の一端を洩せば、來ん野球仕合には、韓國皇太子殿下の御來臨を奉請し奉り、當日は東京電車に花電車を出させ、戸塚のグラウンドに五萬人を集めやうなんかと空前の企てがある。あゝ將軍の前途は多望である。彼が赤ヘルメツトに破れ服、巴屋の靴をハイて、バットを振り舞はす日は近いだらう。其時は潮風生は再び秃筆を振つて、此の痛快男子を紹介する時で御座る。

### 帝法科の獨眼龍

#### ▲無邪氣な英雄書生

官學生に潑刺の氣なしと誰か云ふ。氣概ある書生多き事は、私學生に篤學者少なからざると同じ同理だ。しかし東京法科大学の英法一回生、山口政二君の様に無邪氣にして元氣。學を好む事何ものにも過ぎたるは稀に見る所である。

彼は左の目の明を失して居る。小さい時分、イタズラが過ぎたものだ云ふ。獨眼は由來人をして往々英雄ならしめるものだ。山口君は古賢の所謂「英雄の氣と兒女の情」ならび行はれて悖らざるものであつて、敬服する點はこゝぢや。

彼は一高時代に雄辨と彌次とで名を知られ顔を知られた。彌次では私學の大將吉岡信敬をのぞいて匹敵する者はなかつた。

彼は今年二十五歳を迎へた——「人生五々の春」と云ふ語もある。男性二十五は、



智力體力充實するの時。歳は亥の歳。最も油の乗つた彼を紹介するのは何よりも嬉しく感ずる。

▲岩元先生

夏目漱石君の「三四郎」の中の「廣田先生」と云ふのは第一高等學校教授岩本禎其人であるとは、すでに一部の評判になつた處。しかし眞銘の岩本先生は廣田先生よりも十数倍深刻な教授だ。

日本に哲學者多けれども、岩本先生の様な哲學者らしいものはあるまい。嚴肅なる相貌。蒼みたる血色。疲型なる體格。實にそれは、崇高なもの。

折あつて本郷の大學前通りで先生を見かける事がある。長い葱茶のオーバーを着流して、煙草ポカリ。小首を一寸左の方へ十五度程傾げて、流るゝが如き行人、織るが如き馬車は眼中に入れない様な風采だ。行きたい方向へ歩いて行く——丁度ケーテの傑作ファーストに現はれたるメフキイストクレスなどこんな人であつたか

と想はれてならぬ。

この超世間の岩本先生の眼球を動かさしめ、その歩を枉げしめる大なる吸引力ある磁石が、大學近傍に二ヶ處まで潜む。一は菓子舖青木堂、一は書店南江堂。

先生はもう四十五六であらうが未だに獨身である。妻とするは學問、子の如く愛するは西洋菓子。さればこそ青木堂はその知遇を忝ふするに至つたのだ。南江堂は有名の舶來書籍店、こゝで先生の半分だけでも買ふ學者が東京の各學校を通じてなると云ふ。實に先生の月收の二分の一は化して書籍となるのである。

先生は眞面目の専門書物と西洋菓子を好むと云ふ一事に盡されてゐる。先生は智に於て嚴肅なる學者であると同時に情に於て無邪氣なる一書生——否一小兒——である。家庭に慈母あり。母堂に對する時先生はまるで幼稚園時代の小兒の如し。書齋に萬卷の書あり。この堆裡に座するの時、先生の威權は即ち豫言者の如し。

先生は毎日三四時間より眠らぬ。ウキスキーやコーヒーで精神を昂奮させて二時



三時乃至四時五時迄までも書見に耽ける。鶏鳴を聞いて寝ね、日三竿にして起つて登校す。此故につねに百病併發である之を諫めるものあれば答へて云ふ。

「弊害は知つとるがやめられん。晝間は色んな人に時間の強盜に遭ふからなア……。何病氣か？氣でなほすよ」

實際先生は氣で生きてゐる人だ。あらゆる病魔に囚はれても志いよく堅く、學識益々加はる。大學のケール博士評して日本唯一の讀書家と。

先生は意志の人。「否！」と一言云つたらもう挺が來ても動かぬ。先生は嚴格の人の辛いで有名也。先生は眞學問の人、學を衒はず、著述せず。大賞の賦せるものと申すべし。最後に先生は浮華を忌むの人、直覺の人である。之だけならべたら讀者諸君に岩本先生のアウトラインが合點が行つた事であらう。

わが山口獨眼龍君は岩元先生によつて大なる感化を享け、後天的性格の殆んど全部を築かれたのだ。故に上記述する處はよく味はつておかれん事を望む。

▲無意識に飛び出す

山口君の郷里は埼玉縣比企郡、血統と云ふものは妙なもので、その一門には多血質の快男兒が十數人あるそうだ。其の尤なるものは、法科大學に勇名かくれもなき、柔道四段、新井源水君、水産講習所生で、鯨狩ばかりしてゐる山根揆一君なんぞ、みな従兄弟だと云ふ話。生れた儘に育つたならば彼の本性は確かに狂熱の外に何もなかつたらう。此の實例はその彌次振りに現はれる。

彼は大學生となつても、時あつて一高の制帽制服に身を固め、兵隊靴のヨチ／＼をばく位に、一高を熱愛するが故に、向陵在學中は他校との競技を黙つて見て居れない。家君は頗る謹嚴で、その息が彌次將軍たる事を新聞見る毎に、長手紙を寄せて、勉強をせよ他を顧みる勿れと戒むるものだから、彼も餘程氣をつけて、自ら制御してゐるけれども、風雲急を告ぐればもう夢中になつて飛び出す。彼の口、彼の手、彼れの足はらう大脳小腦からの直接命令によらず、反射的に動いて大いに彌次



り飛ばすのだ。その何如に夢我夢中であるから、グラクンドの彼を見る人の外眞にうなづけぬであらう。

戦い勝てば、彼はコロくと芝生にころびまわつて喜ぶ。負ければ奮然として躍り出さうとする。友人の誰彼は駭いて支へる。歸宅して一兩日は茫として床中の人(尤も學校だけ出るが)となるこれがつね々々の例なんだ。

彼は言ふ。世の中で「我」と云事を扱はされた處の仕事は、如何に大事業でも竟に失敗の作に終る。「夢我」として行なはれ而して、求めずして來れる決果こそ大小を問はず、尊重され、不朽なものとなるではあるまいか。僕の彌次には「我」がな

い心算である。父も諒してほしいものだ。

熱情一片の彼が轉じて片足を深く考へ高く叫ぶ思想家の群に投じた原動力は前記岩本先生のお蔭で、そのヒントは山登りと無錢旅行から得て來たのである。

海はよく人を快活ならしめるが、同時に人の頭腦を散漫ならしめる。山口君は頭

の人として、社會に働く希望あるが故に、岩元先生の説に従ひ、暇あれば山登

嶽を試みた。海拔千尺、二千尺、更に飛むでは、五千尺、六千尺、脚底に白雲湧き、

關八東も指呼し得るの時、この多感青年の胸中に、何の思想が來往したらうか。山

懷の大深森に入つて幽禽の囀りを聴き、さては時雨の過ぎゆく音に耳傾くるの時、

彼の心の緒琴にどんな響を傳へたか。燒山の石、磊阿たるに、夏の烈日が照り返る

處、杖を止めて天風に嘯いて見る、連山の姿。夜静かにして、月光萬里に冴ゆる處、

畔茶屋の腰かけから、望み見る今宵泊する町の灯火——彼は果してインスピレーシ

ョンに打たれずして過ぎる事を得たであらうか。

否！否！彼の人格は、山靈の感化を受けて、著しく改造された。深刻になつた。

眞摯になつた。この儘に進んだならば、法科を撰ぶよりも哲學者、文學者となる方

がよいと思はれる位である。たゞ、こゝに今一つ他の方面に動く傾向あり。それは登

山の超然的なる反對に、現世的、活動的なる、無錢野宿旅行の趣味だ。



野宿旅行！野宿旅行！何たる痛快なる文字ぞや。樹下石上を家とすと云ふ話もあれば、「行き暮れて樹の下かげを宿とせば、花や今宵の主人ならまし」と云ふ歌もある。空山を枕とし、青天を衾として臥すは男兒の快とする處、天下至る處家ならざるはない。現代の青年輩旅行して安宿に泊ればブー／＼云ふ以ての外也。モツと野宿旅行の趣味を解せよ。

こゝに説き出す山口獨眼龍君の野宿旅行は日本一品ぢや。破帽短袴、棒大のステッキ肩にして、その先に眼ざまし時計をブラ下げたり。下駄カラゴロと引ずつて六十餘州無銭旅行だ、尤も眞の無銭では乞食か泥棒をせねばならぬ。そこで少々の金を携へる。驚く勿れ日當正に十二錢也。

山口君の健脚と來たら有名なもの、日に三十里は何でもなし。夜になると、田舎ならば神社、堂宇、都會ならば小學校たご目あてをつけておく、そして勝手に見物し、視察し、眠くなると、堂の影、小學校の雨天運動場などに入つて一夜の夢を結





ぶ。夜五更にして、二圓五十錢の眼さまし時計は、代價相應の鐘をふり立て、汝起きよと呼びさます。早速飛び立ち、毗を決して天を仰げば、有明の月面に亡りて、その上半身をさしのぞき、星露けく、風冷やかに、天地肅然として、物象是より新たならんとするの相を示す。顔をそこそこ洗つて、出かければ、三里五里は飛ぶが如く、漸くに東天白みて夜は明けんと欲す。大に快を叫んで、寮歌軍歌デカンショ節あらん限りをぞなり散して行く程に、日は正東の峰に昇りて、赫奕たる靈光心裡に徹す野良の百性共、鋤の手を止めて、

『書生さア早いもう！』

……いつもこの様に運ぶならば野宿旅行もさづ趣味ばかりであるが、實際は多く此反對、露に臥し、雨に沐し、風に櫛けする。そののみかは、時に小學校の宿直殿に見つかつて大目玉。由來英雄と大悪人の人相は一致するものださうでもあるし、特に山口君は隻眼で弊衣だからたまらぬ。申譯あれば白洲でせいとばかりに引つ立

てられる事もある。しかし何も恐るゝ處はない、三寸の舌頭ブルナの辨あり。懐中に學校證明書あり。悠然として應接し、快然として事落着に及ぶのである。

かつて須磨で此の奇禍あり、夕方巡査に引つ立てられんとした。時に渚をハイカラな浴方で、三五人打ちつれて散歩するは、後章、森川町の梁山泊にある、法科大学の熱鐵火丹波栗事、本名蘆田均君ちや。

『おい蘆田！』

呼びかけられて先生達振り向けば、怪人あり。思ひきや是が山口君！

『やアどうしてこゝへ』と目を丸くする。巡査も驚く。話がわかつて、一同手を打つて大笑ひ、目出度く市が榮わた事もあつた。

彼は心平かならざる時、乃至怠りたる時は、行いて岩元先生を訪ふのである。岩元先生は學問を妻とし専念是に身を打ちこみ、意志の力で、病氣を征服しつつある人、山口君は是を真似て、如何なる病氣にも決して服薬はしない。靈は如何に



超凡なりとも、肉は金鐵でないから、露に臥し、雨に浴して旅行し過ぎた決果、一度肋膜をやつたが、此の折さへウンと自ら踏ん張つて立派になはしてのけた。無論是れでは例の腹式呼吸法が非常に手傳つたのである。息は必ず鼻から入れて下腹で呼吸すれば、非常に健康を増進し、強健な體格になるものだ。イヤ、是について面白い話が御座る。

▲雪隠が書齋

潮風生は常に思ふ。人間一生を五十年として、廁に費す時間を毎日平均五分としても一ヶ月百五十分。一年千八百分。五十年九萬分。是を換算すれば、正味六十二日半となる。漫然と費すものは、これだけ命を縮めたも同じだ。況んや——事聯か尾籠ではあるが——日本流の排泄法は、下腹に力を入れ、頗る腹式呼吸の要領に合するが故に、上圍中の精神はコンセンツレートされ、レフアインされ、非常に勉強に持つて來ないのである。山口君は隻眼よくその間の消息を着破し、高等學校時代

から、大いに雪隠をスタデーとするの習慣を自ら獎勵した。

向ヶ岡の便所——廣々としたグラウンドを控へて、窓より上野の森の下風が吹き込む。三尺四方はこれ自らなる小宇宙也。別乾坤也。高らかに叫ぶも自由。書を綴いて思索に耽るのも自在。わが山口君はつねにここに籠城したのだ。

笑ふ勿れ。これ眞面目なる一の提案である。雪隠は確かに、空氣混濁の教室より以上の感化を人に興ふるものである！。山口君はこゝで英雄傳を読み、哲學を思ひ、侍歌を作つた。其來るが儘に躊躇して出でず、二三十分にして尻の寒さに我に還つた事もあつた。此頃でも此の法を行ひ、「法令集」やつて居るさうだ。昨今は丁度議會の項との事、臭い議會の規則を便所で埒をあけるのは其當を得たるもので、さて、皮肉の妙を得たものぢやわい。

序だから書いておくが、一高の便所にも御多分に漏れず、樂書が澤山ある。シカシ天下に誇るべきは、滔滔たる便所に散見する、所謂落書に一ツもない。みな潔白



な無邪氣なものばかりである。

野糞して劉備は髭を首へ巻き

と云ふ奇抜なものもあれば、

昔ながらにかはらぬものは水の流れと糞の色

と云ふもある。

朝寒や寒くないのはケツばかり

ストームで上げた翠丸延ばしに來

壯士一入復不出。ハクシヨイ

便所で方程式を考へる奴の氣が知れぬ。臭學。臭學。

なんて云ふのもある。何にしろ、一高の落書は雪隠文學である。飽くまでも校風を發揮して居るヲ。

△山口式修養法

彼はかくの如、剛健である。彼れは山口式の哲學と山口式の修養法があり。その要領はかうだ。

近代の純文學の學問上の價値は別として、之を青年にすゝむべきものに非ざる事は明々白々の理である。青年は須らく剛健の氣風を養はねばならぬ。山に登れ！野宿をせよ。その時の心は軟文學と兩立しないのである！

四疊半に籠つて大飯を食つて廢ころむのであるとどうだ。考へまで四疊半的になるぢやないか。楣間には美人の寫真懸り、本箱の上にはこの冬空にも裸女の像が立つてゐる。一籠十錢の切炭は、巻煙草の吸ひがらだらけの火鉢の中でカン／＼と燃えて、部屋の中の空氣は生ま温かい。この時、古典的本と近代文學の本とをならばたらごちらを取るか。云はずして明である。

近代文學の弊は第三者の心となれと云ふ事であらう冷やかな觀方では猫をかぶになる。これが滔々たる青年に流れる風潮である。されど吾儕のである。

て上京し



な無邪氣なものばかりである。

野糞して劉備は髭を首へ巻き

と云ふ奇抜なものもあれば、

昔ながらにかはらぬものは水の流れと糞の色

と云ふもある。

朝寒や寒くないのはケツばかり

ストームで上げた罌丸延ばしに來

壯士一入復不出。ハクシヨイ

便所で方程式を考へる奴の氣が知れぬ。臭學。臭學。

なんて云ふのもある。何にしろ、一高の落書は雪隠文學である。飽くまでも校風を發揮して居るテ。

△山口式修養法

彼はかくの如く、剛健である。彼れは山口式の哲學と山口式の修養法があり。その要領はかうだ。

近代の純文學の學問上の價値は別として、之を青年にすゝむべきものに非ざる事は明々白々の理である。青年は須らく剛健の氣風を養はねばならぬ。山に登れ！野宿をせよ。その時の心は軟文學と兩立しないのである！

四疊半に籠つて大飯を食つて寝ころむのであるとどうだ。考へまで四疊半的になるぢやないか。楣間には美人の寫眞懸り、本箱の上にはこの冬空にも裸女の像が立つてゐる。一籠十錢の切炭は、巻煙草の吸ひがらだらけの火鉢の中でカン／＼と燃えて、部屋の中の空氣は生ま温かい。この時、古典的本と近代文學の本とをならたらどちらを取るか。云はずして明である。

近代文學の弊は第三者の心となれと云ふ事であらう冷やかな觀方になる。これが滔々たる青年に流れる風潮である。されど吾等



冷かになるよりは、三分の熱情を帯びたいものではないか。

諸君、雪江りをしたあとで、近代文學を讀んで面白いか。この時

シヤ、ローマの詩や文學が、胸に共鳴をおこさしむるのである。プラトーン

の如何に高遠雄大なるよ、サツフォアの詩の如何に清雅純潔なるよ。オリンピッ

ゲーム物語の如何に痛快なるよ、吾等はこゝに活動の源泉を見出す事が出来る。學

生の時代は學問の時代ぢや。無論運動もよいが、プロフェツショナルに流れてはな

らぬ。遊戯もよいが、自駄落に墮つては禁物である。運動遊戯の中には、剛健勇壯

の氣と伴つて、嚴肅温の情が漲ぎつてゐねばならぬ。而して、此のヒントを興ふる

ものは古文學に外ならぬ。云々。

諸君に異論もあらうが、是は山口君の實驗より歸納されたる結論である。

### 統監を震撼せしめた豪傑書生

▲郡司大尉然たる風貌

僕は路巷にニヤケ書生を見る毎に、かの田淵豊吉君を思ひ出さず居られんのである。

彼は和歌山縣の産、造り酒屋の息である。小さい時分から經歷を書けば長い話

だから、大抵おつ端折つておくが、學問が出来て、政治家志望であつた事と、級長

で、盛んに頑童連の牛耳を執つた事は擧げておかねばなるまい。

中學の四年の時だ。少しの行違ひから引つ込み主義の校長と衝突し、大いに争

たが、長い者には捲かれる世の中、美ん事放校の憂き目に遇ひ、笈を負うて上京し、

撰拔試験をうけ京北中學の五年級へ入つた。流石に懲りたと見へこゝでは猫をかぶ

つて一年を送り、三十八年四月早稻田大學の政治豫科へ進んだのである。



彼は身長五尺六寸、額廣く、物ごしおちついて、頗る太ッ腹の相を具へ郡司大尉然たる岩盤な軀だ。元來が凡人と違ひ英雄崇拜主義で、向上心のあくまで強い——と云つて決してアセラぬ男とて、市井の俗塵にまみれて、下手な寄宿にアテガヒ扶持を食つたり、家鴨の様に尻ふりあるく下女の住む下宿へ行くのは大嫌ひ、そこでわざ／＼不便利な郊外に住む事となつたのである。

▲世界を智慧で動かす人

家は城西戸塚にあり。早稻田大學を去る半里強、大久保停車場へ六町、新井の藥師へ一里ある。尤も是は餘計な話ぢや。

家賃は一ヶ月二圓五十錢、ガラリと戸を開けて入ると六疊の間——是がとりもなほさず、お座敷で、客間、應接室、食堂、兼、寢室である。その奥へ通れば臺所、スグ裏口へ抜けられる。たゞ袖の様になつて二疊敷の物置があるだけだ。

物置きは薄闇がりには、大英百科全書が光つてゐるのを御大將として、錆びた獵

銃、鐵啞鈴、棍棒の面々、スワ鎌倉と云へば、いつでも御主君の御前に出られる様に揃つてゐる。雑兵として塵だらけになつた繪の具や、表紙のちぎれた雜書、古机、何やら彼やらゴテ／＼とところがつてゐる。是だけが田淵豊吉君の總財産であつた。

この破家に彼は泰然として坐つてゐる數冊の洋書やノートを載せた机の上には拳大の小地球儀が二十三度半に首を傾げてゐる。青い色で比較的大きく塗つてあるのが露西亞、蚊蚊を叩き潰した時に出る血で充分間にあふ位、赤く小さく彩られてゐるのが日本帝國だ。田淵君は書物に倦きがくると、いつもこの地球儀をまはす。

「オ、爾、小さき日本よ。然れども爾の使命は偉大なり。偉大なる使命を果さん爲には、大いに修養し努力せぬばならぬ大なる宇宙は較べては粟の様に狭少なる島根の同胞イガみ合つて、離の争ひをするより、ドン／＼飛び出して世界の舞臺に活動するがよい。天の恵みで男に生まれ、幸にも高等教育を受けた者はこの覺悟がなくてはならぬ。ネエ、さうではないか。」



田淵君は豪傑であるから、婦女子の様に獨り言はせぬが、心の中ではいつもかう思ふから、思ひ乍ら、太い人さし指で西伯利荒原のあたりをトンと突く、忽ち世界に大動搖がおこつてキリ／＼イと音がして、東洋も西洋も十日分ほど廻轉する。世界を指先で動かす事はハーキュリーでも出来まい。シカシ智力で動かすのに英雄ならば造作ない譯だ。かう思つて田淵君はまた書見の日課を續るのが常である。彼だつて意識を具へた人間である以上は時に解れ五慾の誘惑に襲はれる事が無いとは斷言せられぬ。シカシ世には五慾を満足せしむる樂みより、まう一層高尚にして、まう一層甚深な樂みがある。

田淵君は誰にでも出来る快樂よりは、凡人の窺ふ事の出来ぬ快樂を追ふたのである。

▲一と晩も女が寝ない家

彼の家ほど不潔に縁喜のよい家は無い。建築中で、まだ壁の塗り上らぬ先から

田淵君が住み込んだから、未だ一度も女の寝た事のない家だ。パンコツ書生には是は第一有難い。

尤も女が寝ぬ代りに男は鼠さへ驚くほど泊る事がある。牛鍋をつ／＼、豚鍋をつ／＼、時々旅行などしてくると

『小生信州より熊の肉持ちかへり、諸君と一杯やり、大いに食つて見たく……』

など、案内状を盟友に送る。ソラ縮めた！ 行け／＼とおしかければ、六疊に十人近く集る。カンジンの熊はほんのチョツビリ。あとは葱ばかり。何でもかまはん煮る／＼とあつて、母家から大鍋かつぎ出して何でも叩き込む。マクベス物語よろしき騒ぎ。

僻村の薄酒、飲むに足らざるも、なほ無きに勝るから、一人は走つて怪しい酒を買つてくる、酔へば議論する。歌ふ。腕角力。脛押。却々に盛んだが決して猥談に時を過す事はない。今の學生界を見るに、如何に年頃の男ばかりなりと云へ、興に



乗れば多くは女の話をするのである。女と申せば漠然たり。最も罪淺きは將來のオカミサンの問題を計議し、更に女學生の噂や横丁の娘の縹緞である。だんだん下等になると、土瓶を持つて来た下女にからかつたり。近隣娘番附を作つたり。更に悪所遊びの實驗談。その仲耳を掩ひ目を閉ぢねばならぬ醜談怪態を爲すもの多し。田淵一派は決してこんな話はせぬ。

かくの如くにして彼は一部の者に敬愛されてゐたが、一般はまだ彼の名を記念しなかつたとは云へ雖は囊中にあるもよくこの尖端を露すもの。時はやうく来たのである。

▲朝鮮王華族事件

早稻田八名物の一つに『擬國會』といふのがある。平たく云へば「國會ごっこ」だ。角帽八の字髭の大男が、遊ぶに事を飲いて國會の真似をするのぢや。急進黨で御座る。保守黨で御座ると。朋黨を組み内閣を作つて、一日天下に空想を現實させ

んとするのである。袴に赤インキのついた大臣様や。長髮肩に波うつ代議士は日比谷の議會では見られぬ。

田淵君は改進黨の主領で、提出した議題は驚く勿れ

「朝鮮王を日本華族に列するの可否」

サア大事件出来は是からぢや〜。

當時早稻田には十七名の朝鮮留學生がゐたが。早速眼を三角にして。考へて見れば至極(でもなからう)御尤もな事。憤慨したのも無理もない。事忽ち各學校の留學生に傳はり、一千名の彼等は羽檄を飛ばして、集るもの一千人、朝鮮髭を逆立て、早稲田大學へ押しかけた。もし主張を容れずば、彼田淵の首を引きちぎり、學校に火を懸け、下手人一同屠腹して死ぬと、教團いてゐるのだ。新聞紙は面白がつて書き立てる。巡査が繰り出す。電話がかかる。一時に授業も何も中絶されさうな大騒ぎである。



高田早苗博士は、由々敷大事なりと留學生總代を引見する數回、やうやつこの事  
で該議案を撤回し、田淵某は退校したとダマして局を結んだのである。

此事件を遙かに聞き及んだ時の統監伊藤は驚くまい事か、連日電報を日本全國の  
各専門學校へ飛ばして、學生の言動不謹慎なるため、國際問題を惹起するなどの失策  
なき様にと、半ば嘆願的に申入れたから面白い。本尊の田淵君は、母家の妻君が彼  
の身の上を心配して人を遣つて保護させたのも、朝鮮人の決死隊が出没するの空  
吹く風を格別氣にも止めず、圖書館でマーシャルの經濟書か何か讀み乍ら、額をビ  
ヤシン／＼叩いて

『今年や南瓜の祟り年。愉快ぢやく』  
と嘲笑つて居つた。

△野に叫ぶ人の聲あり

人間は世に出るには必ず世人の記憶に止る一つの事件がなくてはならぬ。事件が

大きければ大きい程、世に認められる度合が大きくなる。更に世に認めらるゝ事件  
を重ねるに従ひ益々名聲が揚るのである。

田淵君の朝鮮王事件は純然たる社會上の問題ではなかつたけれども、學生間の  
視聽を聳かさしむるには充分だ、彼は一躍して校中の名物男となつた！此迄彼が  
幹事たりし雄辨會も急にこの爲めに盛大になつたのである。早稻田雄辨會が、今日  
ある。その備は彼の作つた處なのだ。

凡そ何事にも上達するには苦心といふものが要る。田淵君は決して筆の人では  
なく。また然らん事を希望せぬが、口の人とならうが爲には随分勉強したものであ  
る。

彼の容貌は畑野である。従つて理想もワイルドで、練習法もワイルドぢや。彼は  
朝など授業が間があると見たときは、臥龍閣の戸口に立つて、往還に憶面なく大演  
説をやる。日は蒼空にキイラ／＼と昇つたばかり、丁度お百姓連は下肥車は曳い



て通れば此始末。「あら何だつべい」我もくんと車を止めて一服がてらに聞いて  
ある。門前忽ち糞車の行列——いやはやたまつたものではない。

彼の辯に情夫は起つかも知らぬが、お百性は腰を据へたままである。釋迦に  
説法も効能のないと同じだ。シカシあると無しとは關する處にあらす。しやべるだ  
けをしやべつて、あとは戸締りをして、テク／＼と學校へ出かけるばかりである。  
學校への通り道は麥浪菜畝の幾町をへて、戸山の射的場の傍を十町あまり行く  
のだ。されば、演説せんとせば、到る處にそのブラットホームは見出される。氣さ  
へ向けば彼はつねに。野に叫ぶ人となる。ヨルダンの川べに大聲叱呼せしヨハネも  
かくやとばかり、何んと頼母しい事ではないか。

筒様は練習した彼は壇上の雄と稱せられたのも無理からぬ話。首尾照應した、引  
例豊富なよい演説をする。今なは衆人の耳底に残つてゐる傑作は『鐵砲打ちの話』  
『大隈伯の銅像について』それと、第一高等學校の雄辯會に早稻田を代表して試み

たる『大國民となるの覺悟』豫科大會の折の出演々説など、特に上出來で、多少の  
『身振り』も加はり、自然とヒヤ／＼を叫ばずに居られんかつた位。

あゝ、さるにても彼が國會にその快辨を振ふはいつの日?

彼は決して糞勉強でない。磊々落落であるが義理を缺かぬ。粗野であるが、好ん  
で不養生はせぬ。よく語りよく散歩するが決して無駄な時間は費さぬ。然り、彼は  
つねに何事をか爲し、又は考へつゝあるのだ。

彼は政治科であつたが二番迄漕ぎつけた時もある。卒業試験の折は、殘念にも急  
性腸カタルにかゝつた爲めに五番か何かであつた。何は兎もあれ、立派な成績で波  
欄多かりし學生時代は、一先づ終結を告げたのである。

△急ぐな怠けるな

卒業すれば學士様ぢや。早稻田大學政學士とか何とか云ふものぢや。けれども肩  
書を持たねば、尊敬せられぬ人は、金箔かつけねば有難くない佛様同様、ロクでも



ないにきまつてゐる。政府の刻印があつて、からうじて五錢の嚴貨を保つてゐる白銅貨は、潰しにしても貨幣の時と價の變らぬ金貨の比ではない。

人は須らく潰しのきく男になりたいたものだ。赤裸々にしても美ン事價の踏める男となりたいたものだ。金貨的の男となりたいたものだ。かの肩書と、勳章とによつて、やうくエラさ加減を保障してゐる滔々たる大官連は、白銅的の男だ。田淵君の大嫌な男だ。

田淵君は大學の業を卒へた位。目出度いとも何とも思つていやしない。眞の男兒は生涯修養し、生涯向上を怠つては相濟まぬ。早稻田の學堂より去ると同時に實社會の波に投ずるのである。別に何とも思つちや居らん。況んや學士號をや。その他のもをや。

彼は破れ袴で卒業式に例した。同級生は早や頭をチツクで光らし、金ブチ眼鏡をかけ、或物はもう肩書附の名刺をこしらへてゐる。毛虫が急に蝶々になつた様に、

いそぐ飛びまわつてゐるわい。その恐や憐む可く、その喜びや羨むべし。とは云ふものゝ、人、各々信する所あり。彼は彼、吾は吾、悪い事ではなくば勝手に振舞ふがよい。田淵君は頭の光る連中をエライとも思はねば、弊衣の自分を賤しいとも考へぬ。有難さうに授與された紙ツ片をぐるぐ巻にして、歸つたゞけの事である。

大抵の卒業生は、喜びはたゞ一日に止まつて、その翌日から就職難に襲はれるのである。處が彼は前述の通り、金持ちの忤だから、鼻の下を埋める心配はせんでもよい。更に學問の深さを究めん爲め、同校研究科に籍を置いて、舊來の通り、足駄踏み鳴らして戸山の麥浪菜畝の小路を通ふ。時に射的場の土壕に攀ぢのぼつて、落暉に對して大雄辨を振ふ。

學校では多く圖書館に入つて、古今東西の大作名著をあさり、智見を廣ふした。政治家となるにも、事業の人となるにも、哲學思想は必要であると考へついで哲理を含む書物に親しんだ。是迄ミルやワグナーを専門に説いた經濟書生の唇は、ペー



コンの名も登る様になつた。プラット。カーライル。と云つた風な名も時々引かれる。漫然として、古人の理屈を勉強した彼は、イクラカその説を品臨し、是非する或る根帯ある智識を得たのは全く稍や哲學に志したお蔭であつた。

彼は若き男が情人の家に出入するよりも茂く、かつ長時間を圖書館に送つた！

以上述べる通り書に淫するは半面の彼で、半面の彼は事業の人であつたのだ。か

の大野恭平君らと共におこしたる丁巳俱樂部は、事實上田淵君が主となつて經營し

たのである。幾度か公會演説會や、遠足會が催されたが、いつもく成功したのは、

彼の劃策があつた力であつたのである。是らの會合に諸名士を引っぱり出したり、

諸新聞雜誌に其記事を記載する懸け引き確かに彼が他日活動する下ごしらへ

練習となつたに相違ない。また早稲田の雄辨會も彼の爲めに盛んとなり。高談雄辯、

優に一方の驕を稱する様になつたのである。

田淵君の二年は擬國會の總理大臣になつたり。何かして居る中にドシ／＼過ぎ去

つたのだ。學長、高田早苗博士はつとに彼に囑望する處あり。浪人生活も面白いが、もうよい加減に方面をかへぬといかぬ。幸ひ實家が金満なら、洋行でもして、箔をつけてくるがよいと語られた。

無論田淵君も夫れを希望してゐる。シカン、色々事情があつて思ふ様にならないのだ。處が――

機は到れり。機は到れり。四十三年九月歸省中にとう／＼願は届いた。

▲四年間の別れ

洋行！ 洋行！

あゝ智慾に渴せる學徒の耳に、眼に、此の二字が、如何に響き、如何に映するであらう！

小學時代から地理の上では何十百遍となく聞いた、上海や、香港や、シ

ンガポール、乃至紅海を経て、雜誌の口繪にお馴染みの巴里凱旋門や、伯林の菩提

樹下通や、霧の中から中空に聳ゆる英國議事堂、さては、物質文明の中心なる米國



の所々の大建物を見る事はどんなにか心地よいらう。況んや、數年かの地に停まつて、大學で知名の大學者の講義を聞くを得ば、どうであらう。

田淵君は今、この身の上となつたのである。

目的地は伯林。滞在三年。それより半ヶ年づつを英米諸地方に送り、四十六年十月、菊花おごる頃、滿腹の抱負を抱いて歸朝する豫定で、四年の住家たりし、戸塚の僑居を見捨て、幾多の朋友としばしの別をつけて、九月二十九日の神奈川丸で、渡歐の途に上つたのである。例によつて例の如く歐洲般路も初旅の身にとつては頗る珍らしく、江蘇城外の寒山寺を訪うて昔の跡を偲び、上海では外人の跋扈を實見し、ピナン、コロンボ、シンガポール、さてはスエズの夢安らかに、歐州の海に入り、數旬の道程に數十の教訓を得た。昨今はベルリン大學の聽講生として、孜孜研究に餘念ない。彼の生命は政治であるから歸朝すれば必ず代議として打つて出るだらうと云ふ。シツカリやれ〜

### 山岳會の秀才大學生

#### ▲神經衰弱から發奮

高等文官試験と云ふものは、官僚生活をなさんとする者の登龍門であつて、帝國大學卒業生でも、その末席を占めて喜ぶ程の難關である。それを驚くべし、また法科大學々生時代に受けて、而かも十二番で及第したなぞはどんなものだい？

英吉利法科の四回生河合良成其人の如き、名物書生中、特筆大書すべき一人ではあるまいか。

昨秋、その成績が發表された時、やまと新聞は、彼を詳説し、筆記試験では最上の出来であつたと傳へた。ア、かくの如きよき頭腦は何處から得たのであらうか、天稟か。努力か。之を第一に攻究して見たいものだ。

彼は越中の人。中學時代もよく出来た、更に四高に入るに及んで、多方面に活動



し、文藝部などを背負つて立つて、ズイブン鳴らしたのであつた。されど好漢惜むらくは兵法を知らず。無性矢鱈に勉強したのだから、頭をこはして仕舞つて、大學生となつた頃は才人愚にかへると云ふ程でもあるまいが、兎に角薄ボンヤリした。極度の神経衰弱で、面三度卒倒をした事もある。學士位に無論なれやうが、夫以上は望まれさうにもなかつた。

流石は秀才！彼はこゝで断然方向轉換をした。運動なる哉。運動なる哉。エラクならんと欲せば、先づ容物を作るべし。容物とは何ぢや。健全なる體格である。健全なる體格には健全なる精神宿る。やるべしやるべしと、そこで山岳會員となつた。

▲人外境劍山探検

今日でこそ、山岳會とは山岳に興味を有する紳士の集團で、各方面の山岳を探検し研究し、毎年一回、山岳と云ふ雑誌を出す事を知つてゐる人も多いが、其時分にはあまり知れてゐなかつた。

彼は此會員となつて、しばらく學校を忘れ大いに活動した、特に四十二年七月二十二日、同行三人と越中劍岳の踏破と云ふ様な快事を敢てした。これは是非記さねばならぬ。

中央日本の大峻嶺が。甲斐の間におこり、勢ひを集めて北に走る六十里。發して劍岳の高嶺となる。往昔弘法大師が草鞋六千足を費して尙、登り得なかつたと傳へらるゝ處。數年前陸地測量部員某が、はじめて頂上に三角臺を立てたと誇る處なのである。シカシ部員の言は嘘ツ八で、狡猾なる彼は人夫長次郎なるものを遣してお茶を濁したのだとやら、人夫長次郎年三十九。山登りの天才である。一行は此外に常次郎、淺次郎の三人を備ふて、一切の行糧を背負はし、新川郡の立山温泉場を出たのであつた。ポケットにスケッチブックあり。採集胴藍は腰にあり。先以て前人未到の地を踏まんと意氣大いに昂つた。此夜は室堂と云ふ處で一泊。明くれば二十三日午前七時に此の日本アルプスに志した。九時、峠の上に出づ、徑四五町



もあるらしき雪の谿を、熊追ひの懸け聲を叫びながら、登つて行くのだ。萬古を貫いて消ねざる雪を踏む足音のいかに勇ましきかよ。或時は靄霧のしぶきを浴び、或時は峭壁の横をめぐり、山腹の右端U字形を爲す處を長次郎谷と命名などしつゝ、迂廻、昇降の極をつくして、劔澤なる地點に達した。また十一時で早い、こゝに露營をするときめた。

▲筈と山ざくらと星月夜

こゝは平地で、雑草矮樹、からうじて一夜の夢を結ぶ餘地が見出されるのであつた。雪はこのあたりで消ね失せて、南より来る流れに合して、白檜、榊の樹に満ちたる谷底へ倒おとしゆく。仰げば幾十百丈の雪瀑の上に、山岳美を發揮したる山の骨が、灰色に聳ねて居る。

寂寥、また荒涼——山氣ひたくと肌に迫る！

人夫は小屋掛けに従事すべく起つた。白樺を伐る音丁々と木魂して、こゝに男の

子の腕の冴わたる響を傳ふ。一行はやゝもすれば手足を奪はれんとするを忍んで、茂みに分け入り、色々の植物を採集した。筈があるかとおもへば、山櫻も咲いてゐる、白根葵も、大葉黄蓮もある。春と初夏とは手を引きあつて、山をおとづれたのである。

一時間ばかりして掘立出来上つた。方一丈ばかり、北向きで、油紙の天井、一方は岩で風を防ぎ、火は入口で焚く、浮世離れた佗び住る。鴨長明君なら方丈記でも書くであらうが、こゝには血の色の紅い健兒ばかり、夫んな厭世家など居らぬ。胡坐をかいて太平樂、やがて炊事係は生意氣に味噌汁なんか煮て出した。珍物には筈、其他色々の高山植物をたゞき込むでの仙人料理だ。腹がへつてる矢先なり。食つた食はぬは云ふだけ野暮に御座候。

四時に及んで、冷風細雨を孕んで蕭々と到る。おやおやと聊か呆れてゐると、高山の氣象、變化の早さ！夕暮には雨收り、雲の晴間から、星がチラ／＼と笑ひ出し



た。明日の英氣を養はうと一同は早寝をした。アルミニウムの水飲みに山櫻一枝、夜の枕邊を守り、折々消えてはまた燃ゆる残んの箒に浮き出したかのやう。

颯々たる深夜の山嵐、幕營の夢吹き破れて、河合は先づ目さめた。下弦の月は凍つた様に油紙のすき間から見ゆる。立ち出すれば、一糸亂れぬ宇宙の組織、あゝ、崇高！あゝ森嚴！！

夜目にもしろき雪の墜じま。月今しかくれんとする山は眠りて、巨人の如く黒くうすくまる。いづくよりともなく、ゴーンと云ふ音が聞ゆる。嵐が峰を渡る音か、流が峽を下る響か。こゝに彼は雄辨なる宇宙の教へを聴くの思ひがあつた。

『河合！雨が降つてゐるか？』テントの中から一人が聲をかけた。

『どうして！星が降りさうだよ。安心したまへ！！』

『多謝々々』

テントの人はまたもや夢路を辿るらしい。河合は愛誦する西詩など微吟して、な

ほしばらく立つてゐた。

月は沈んで空の色は濃さを増し、星は今一二時間の命ぞ、光れ／＼とばかり、頻りのその光茫を發揮するのであつた。高山の星月夜は何ものにも比すべきものもない凄さである。流星一道、長く尾を曳いて山また山の上を迂つて西に走る。河合は思はず痛快を叫んだ。時に午前三時を過ぐる五分。

▲熊を追ひ拂ふて絶巔に至る

四時半一行は準備を備へて、微光を力に小屋を出た。快晴を確信して、雨具を捨て、人夫には寫真器と辨當と探集胴蓋だけを擔がせて、各々手には力杖、足にはカシキを緊めてゐる。固まれる雪を踏みしめ、齋口で道を開きながら『向上、向上』と叫びつゝ、どこまでもと登つて行く。

日出の奇觀！これを拜し終り、淡き影を友として、猶ほも行かうとする時——六時十分。ふし見れば、七八町のかなた絶壁の下の雪の上を黒く蠢めくものがある。



人外境の怪物——熊!!

忽ち人夫は熊追ひの懸け聲を大呼した。

「ほうい。ほうい。廻れや廻れ。上へと廻はれ。下アから追ひ廻はせ！」

一分二分の間は熊は儼然とかまへて動かなんだ。そればかりか、やゝともすれば襲ひ來たらんづる状を示したが四分の後、豁然身を躍らして逃げて仕舞つた。そこでこれを「熊の岩」と名をつけた。路はいよゝ急となり、三十六七度の角度を示しごうしても、迂らずに居れぬ。そこで細引を取り出し珠數つなぎに結び、一人がころんでも他の者に支へられて止まる様にした失脚、復失脚、七轉び八起の處の話ではない。雪の盡くる堪所まで、苦心慘愴、普大抵の事にあらず。八時過、曉岩の部に入る。

吉田松蔭は山に登れば氣宇を廣くす。俊傑の心は山に含まれて居ると云ふ意味の言を吐いたさうだが、全く其の通り今、一行が、險崖の上へ出で、人界を俯瞰す

れば、眼下の大岩壁幾百仞。神斧の鋭を想はしめ一條白き早月川の流に添ふて、芥の如く横はる伊折村の孤村は、人の住む地の狭小なるを悟らしめた。

凸凹極りなき岩を或は縫りつき、或は躍り越えて、六十間あまり登りつくすと、二年前に建てられたる三角臺が、わびしげに見えた。風露雪霰の苦闘二年、もし彼が人間であつたなら嬉し涙をほろ／＼こぼした事であらう。風つねにはげしければ、冬の最中も雪は積らず、終年その鋭き棒尖を振つて天に宣戦をしてゐるのだ。かくて絶巔に立つたる一行は劍岳わが脚底にありと、大いに得意がつた。

常次郎は岩角で向ふ脛をブチ破つて鮮血淋漓と流れるにもかゝはらず、四肢ふみしめて狭い舞臺に躍りまはつた。

舞臺は狭いが展望は廣い。あくまで澄み切つたり空にクツキリと肌を見せたる日本アルプスの萬重の峰巒の一起一伏。動かざる瀟かとも思はれて、雄渾の情に堪へざらしめる。立山、赤手、御岳、笠岳、薬師岳、白山、そのスカイラインの美しさ



まごごに都會の人に知るべからざる處、遙かに遠く立ち登るは淺間の煙。富士は玉肌を惜んでか、厚き積卷雲に包まれてわづかにさしのぞいてゐる。

一行の眼はこれだけを見をはつて忙はしく脚底に及ばせば、巖壁千尺、なだれも打たず落下して、千仞の谷に入る。浮雲かすかに搖曳する間より、一碧富士灣の濃きが湛へられてあつた。絶景に吞まれて、一行は疲れを忘れ、飢を忘れ、語るを忘れた。各々の心は、想像の翼を馳つて、各々の方面へ飛むのだ。

記念撮影を終り、西南の方に二間は下れば、奥行六尺、幅四尺ほどの岩窟がある。無論人工のもの——何でも久しい以前は行者が住んでゐたと口碑に残るはこゝではなからうか。窟のまわりを小さく、優しい草花が綴つて、天然の恵みを示す。チシマアマナ、白色チングルマ、イハキリンソウ、ミツバワウレン、イハタケ、イハウメ、イハヒゲ、タカネウスユキサウなどは其の主なるもの、一行は仔細に窟を観察して、長二寸、幅七分の小刀身を發見した。錆はあまねく刀身を犯して、ボロ

く砕けさうだが、これでも一度は光り輝いて、秋の氣を湛へた事もあらう。確かに幾千百年前の遺物と知られた。

一行は以前の三角臺のもとに立ち還つて中食をすませた。斷續するは蜂の羽音——この絶巔にも、此の小蟲の努力せるをおもひ、人にして蜂に如かざるもの多きを語りあつた!

すべて 高山の性質は、晴れたる日には午前の間雲無く、正午前後から雲現れて、峰を呑み嶺を吐き、千變萬化のたはむれを見せる。そして夕方になると、雲は次第に収まるのだ。遇圖ついで雲に囚はれてはたまらぬ。そこで鐘詰の空殻に一同の名刺を封じ、岩窟に收めて永久の紀念をなし、十時三十分下山の一步を踏み出した。例の雪の領土に入ると、日光で大分雪が軟かくなつて來たので、一としほ行き惱む。それに白光眼を射て、頭がぼんやりする、踏みしめる毎に、その衝撃が腦の心に徹へる全くやり切れない。熊の岩にたどりつく迄一時間と三十分。やれ、安心と、



こゝで午睡の快を執つた。

かれこれするうち雲の出る時刻になつたが、いつになく無風無雲である。これ天祐とでも名づけるか。實に感謝すべき事ぢや。

二時半、熊の岩を發し、こけつまろびつ、而かも一瀉千里の勢ひで、卅分ならざるにかの露營小屋に凱旋した。さきに残されたる山櫻はあでやかに笑ひで一行を迎へた。

荷料理に竹の子汁、花鯉、夜食の膳はことに賑やかで、一同の藝づくし、湯を啜つて大いに騒いだ。河合もすゝめられて、目茶々に聲はり上げて唄つた。眠れる山も爲めに眼ざめ、山の神様も、テントをのぞきたくつてたまらなくなる位に……。

翌朝六時なつかしき小屋にアツデューを告げた。この小屋は廿年位残つてますせと長次郎は言つた。八時半頃風俄かに吹きおこつた。願れば劔岳峯頭、魔形の雲飛

び頻りにしてその猛烈さ加減お話になつたものにあらず。此夕温泉場に草鞋をぬいで、これで探險は終つたのだ。萬歳！

▲病氣と元氣

彼の一行の登山は學生として空前であつた。故に。かの山岳會最初の名譽會員、ウオルター、ウエストンなど、河合と話す時には劔岳の事を『貴君の山』と云つた。そうなる。彼はかくの如く山を愛し、山を友として、その餘暇を消した。木曾の月夜に博徒強盗と出あつて、山越ねをした事、半日位は一人、獸一匹にはあはぬ深山を行つた事、ズイブン色んな經驗を持つてゐる。元氣があれば病氣にはならぬもの。病氣でも元氣が出來ればなほるもの。彼は一時あまり勉強した爲めに病氣になつたが、登山によつて、無限の元氣を得來つたが爲め、ついに全治したのだ。彼は高山の怪異に出くわして、非常に膽を練られたのである。夕立は細引の如く、電は己が身より出づるが如き處、泰然として、雲より雲を突破した。白い虹、十字形の虹、



御來光。大入道、こんなものを何度見たかわからぬ。彼は自然と同化して、こゝに偉大なる力あるを自得した。

病癒ひて後脾肉の嘆にたへず、高等文官試験をうけて手柄をあらはした。今は卒業試験を受くべく、精勵刻苦の最中だ。そのエネルギーの強い事は、別項所載の森川町の梁山泊の七豪傑も推服してゐる。

彼の勉強法は單純だ。

毎朝早く起きて、冷水浴、もしくは冷水摩擦、それが済むと、机に倚つて、毛唐の卓説にそのクリアーな頭を試みる、二時間もしてから朝めしを食ひ、ノートをかへて登校する。教場の模様は他の生徒とかはらず。帰宅すると一寸筆記の補正をして、あとはドシ／＼遊ぶのだ。休暇休日には旅行をする。散歩をする。頭が非常によくなつた時、一寸本を見る。その方が、ノベツ暮なしに勉強するより結果がよいさうな。

彼は元來樂天家也。餘許な心配する暇があるなら、シュークリームでも噛つて、教授の噂なんかして居る。梁山泊の大井靜雄や、宮崎一とは特に仲がよく、相往來して、大學の思潮の先驅者を以て自任して居る。宮崎が近頃發明した「利用生活主義」など云ふ、珍妙な主義は、彼一臂の力を借したもので御座る。

利用生活主義はごく現世的、近代的の功利主義なのである。此の主義にしたがへば、友情なるものを認めず、寧ろお互ひが交際するのは利用したりされたりするからである。云ふのだ、此の主義者は訪問しても別れ際に、また遊びに来たまへなど月普みな事を云はず「また利用しに来たまへ」と云ふのだ往來で出逢つても「オイ貴様此頃、チットも利用しに来ないなア」とやつ／＼ける。議論をすれば否難の餘地もあらうけれども、偽善の假面をぬいだ處は面白くないか。

何は免もあれ、將來の良二千石、彼の如きを得たる縣は幸福と云はねはならぬ。



### 貴公子連の蠻カラ旅行

#### ▲八變人精進湖畔に宿る

學習院と聞けば、ハ、ア若様の學校かどスグに聯想する。芋の煮わたも御存じのない公達連ばかりだと、想ふかも知れぬが、然し中にエラ者が多く、現代の墮落書生輩を蹴殺し兼ねぬ勇者も多い。

中にも昨秋帝大に入學した一團の貴公子の在學時代は、學習院は揃ひも揃ふた腕白武者。ごうにかして軟弱の風を矯めんと、寧ろ極端なパンカラ主義を取り、毎學年の終には縦横に旅行したものぢや。こゝに記さんとするは、昨夏七月の事で、連中が目出度く卒業し、次學期は角帽かぶる身になつたから氣が強い、靈秀の富士の山を仰ぎながら、八湖廻りをやらうと、スタコラ出かけた八變人。明治膝栗毛をやつた一件である。

まづ一行の名を列擧すれば、三島彌彦君(三島彌太郎子爵の弟、都下第一の快足家で野球界の名物男)田尻鐵太郎君(北雷博士、田尻稻次郎子爵の長男)。本田讓二君(柴山海軍大將の子息)。柳本喜一郎君(牛込の大酒屋の子息)。酒井晴三郎君(伯爵)。新家光磨君(舊公卿)。柳生基夫君(父君は臺灣銀行總裁)。瓜生剛君(瓜生海軍中將の長男)の面々。田尻君を東道の主人として、オカマ帽子を阿彌陀にかぶり、スタ袋をぶらさげ、箠を背負つて、御殿場を下り、須走りから山中湖に出で、吉田を経てある夕焼凄まじき暮方、精進湖畔の村についた。豆腐屋へ一里、お隠者へ三里と云ふ寒村なれば、薄きたない宿屋よりない。シカシ、一行も随分汚れてるから、大きな事も云へぬ。いよゝ泊る事となり、二階の一間に重き荷物かなぐり捨て、欄に倚つて、ポイヤリ暮れ行く湖を眺むれば、武骨漢共も感心する程の絶景だ。蒼碧の波のあなた、岬がシン出て、白聖の洋館ほのかに見ゆるなどは、噂に聞くスキツ、ル山中の景もかくやとばかり。直ちに挨拶に来た亭主に向ひ、



「あの白い家は何んだと。」問へば、亭主は膝を進めて、  
「へい、あれは悪魔の家で御座います」

▲奇怪なる主人の経歴

そして尙ほ詳しく話すのは斯うだ。

かの洋館は精進ホテル。主人は歸化西洋人で星野と云ふ男、鬚髯の中から顔の出た  
ロシア人的の相貌、察する處、本名はドロンスキー位の奴だらう。水夫を食ひ詰めて  
横濱に上陸し、ある金満家米人の僕に住み込み、次第に信用を得て番頭取締とな  
つた。處が此の富豪、肺病で事務が執れなくなつたから、風光明媚な山間に引退し  
たい。どうかよい地を選定して呉れいとの話、星野が喜んで推薦したのは精進湖畔  
で、其時建てた別荘は今のホテルなのだ。然るに富豪はこゝに移るや否や、俄に死  
んで仕舞ひ、一人も縁者が無いのだから、星野は一躍して持主となつた。其處でホ  
テルを開業したのであるが、色々奇怪な噂がある。今は姉妹の日本美人を妾として

蓄へ、同臭の外人を集めて旺んにバクチをやる。シカモ傍若無人甚だしく、近郷の  
民を視ること土芥の如く、一步でも門内に踏み込む者があれば、小銃を亂發するな  
ご鬼畜に等しき輩ださうな。この邊で腕白な甲府中學生も手の着け様がない。毎年  
帝國や早稻田の書生さん達も来るが、閉口してゐる云々。

聞くより貴公子連一同腕をさすつて、怪しからぬ奴だ。天誅を加へると騒ぎ立つ  
た。何を云ふにも本田、柳生は柔道二段、三島、瓜生は初段、其外も腕に覺わのあ  
る豪傑ばかり。ヨシ、明日はやつけて呉れむと、鼻息荒く寝たのであつた。

▲豪傑連 モーゼル銃に膽をつぶす

翌朝になるといつもの寢坊が、暗い中に起き、村民が盆躍りに使ふと云ふ重い下  
駄をばいて、湖畔に出て見ると、天の輿へか主なき小船あるにスグ飛び乗つて、放  
歌高吟、曉に空気を振はせながら、例の岬に着いた。

もう敵の領地ぢや。



成程聞きしに勝る立派な邸だ。芝原は露を帯びて美しく、通路には小石を敷きつめてある。「生意氣だなアこんな、家に住みあがつて！構ふもんか、片つ端から飛べばしてやれ！」と、松の枝を折つゝ「海行かば——」の歌を口ずさみ。坂を昇りつゝせば、洋館登ゆ。一同異口同音に叫ぶらく

『星野のウ人非人。馬鹿野郎！出てこようイッ！』

サラリと二階の窓が開いた。仰げば、青ざめた日本の病婦人が、白いケットを身に纏ふて覗いて居る。——

『日本婦人を幽閉する極悪非道の星野め出て来ウイ——！』  
と再び叫んで、まさに扉を開けて亂入せとした刹那。

『ゴツド、ダム、ユー。リツツル、ジャブー』

野獸の如く叫んで現はれたのは、六尺豊かの髯男、正しく星野だ。携へたるはモーゼル連發銃、一發ドカンと食らせば、丸は三島の右耳をかすめて、後ろの茂

みに射込んだり！

柔道の強者も飛道具には度膽を抜かれた。ワツとも云はず、踵をかへして、来た道へ一目散、中でも、三島はフートレース大撰子！その速いこと彈丸の飛ぶも及ばず、直に渚の舟に飛び乗つたのであつた。

#### ▲骨折損の草疲儲け

話かはつて八人の内、新家と酒井の兩君は、寢坊をした爲めに、實は置き去りにされてゐたのが。あとで氣づいて、遅れ走せながら湖畔へ赴くと、

『ヤイ手前は何だつて舟を盗みくさつた？』と兄い連にフン掴まつた。是れ蓋し三島君等の乗た主なき小船は、この若者らの持船で、桑の葉を取りに行くに用ゆるもの。それが紛失したのは、手前たちが乗り逃げしたのだらう！甲府中學の小忰だらうが、悪戯にも程があると、火の出る様に怒つて居る。

二人は泡食ひながら見わたせば、其船に對岸の別荘の崖下にある。シカモ人ツ子



一人居らぬから、形は見へながらも取りかへすことが出来ない。平身低頭して兎や角陳じてると、忽ち銃聲二三發、水を渡つて聞へる瞬間、六人の者は争ふて逃げ込んだ。其中の一人は、彈丸が命中したと見へ、投げられた様に船中に倒れた！

「やあ撃たれた〜」兄い連も二人と共に叫んだ。見る〜内に狂氣の如く二三反渚を離れると、撃たれたと思つた者も無事であつたと知れ、胸などおろしたが、アチラの方は、一難のがれて安心したのだらう。軍歌まぢりに遠くへ漕いで行く。二人は魂消て呼ぶ事しきり、やつと通じて歸つてきた。兄い連は、星野征伐と聞いて怒りも和らぎ、かへつて寝めて呉れたけども、逃げた拍子に盆躍りの下駄を捨て、きたものだから、眼の玉の飛び出る位に、法外の罰金を宿屋の亭主から要求されて、一同骨折り損の草疲儲けをした。

▲強盗と誤らる

かゝる日を送りつゝ、廻りめぐつて、沼津へ出で、明日は歸京ときまつた日には

静浦へ泊る事となつた。貧乏旅行をやつたお蔭でまだ懐中にはウント路金が残つてゐる。今晚は皆な使つて仕舞へど、同地第一等旅館、海氣館の特別室へ無理無山に通つた。

一風呂あびてめしをくつてると、變チキリンな三十男が二人部屋へ踏み込んで、

「おまへたちは誰か、何處から来た？」

と尋ねる。さても無禮な言を吐く奴哉と、よく尋ねれば、二人は刑事巡查である、さて吾々が汚い身装で、特別室に居るのを怪しむのだなと氣付いたから、こいつ一つ裏を搔いてやれど、

「へい。實は吉原驛から——」

「フム、さうぢやろ。そして名前は？」

と益々威張り散らす。よい加減にあしらつた末、いよ〜となつて、第一に名刺を出したのは「從五位、本田讓二」父は柴山海軍大將!!



田尻君や爪生君も從五位だ。他の者だつて立派な華族様だ。等しく是れ學習院の卒業生と名乗りをあげた。

刑事は豆鐵砲喰つた鳩みたいに、眼ばかりパチクリく、大いに謝罪して曰く、「ついお見それ致しました。どうか御内分に願ひます。實は吉原驛から數人組の強盗が當地に入り込んだ形跡があつたので――」

と、頭搔くやら、尻搔くやら、モチく後ずさりして消へて仕舞つた。

一同手を打つて、

「愉快ぢやなく」

▲ダニエルは豆はくらひて智者となりぬワツフル好む子の生白さ

▲地下室に錆びたペンを動かして日本の國はなつかしと書く

▲山見れば松に風ある海見れば浪に音あり戦ひの世や

——てうふう——

### 柔道快漢新井源水の猛勇

#### ▲名物男崇拜の一高

一高は英雄崇拜主義の學校である。何でもズバ抜けて居る男は幅が利く。學問の出来るのは秀才と尊まれ、運動家はチャムピオンと稱へられ、雄辯家は辯士と敬せらる。酒をウンと飲めば、豪傑の名五寮を壓し、虎髯なればオヤチの株は與へらる。されば、學生は何かでコンマ以上の人間にならんとして努力するが爲め、他の高等學校や専門學校に比して、ヨリ變りたる傑物を産するのだ。殊に其の現象は寒稽古にあらはれる。

霜降ること、朝々濃く、戶外の氷、夜々に厚し。この時にあたり、寒稽古は頭をもたげる。あらゆる方面に於て、吾れ向陵の覇たらむと、競争する劇しさは驚くべき程なり。



有明月夜、時計臺の針が三時に垂んたる時、運動場を訪ふて見玉へ、彼處にオツチニ〜と懸け聲勇しく、レースの練習をなせば森かげでは未來のデモスセネスが「諸君吾輩は——」と叫ぶ。柔道擊劍は勿論大繁昌。更に風變りなのは、蠟燭つけて習字の寒稽古をやるピアノの寒稽古をやる者さへある。——序に云つておくが此ピアノは、日本に三臺よりない尤物で、學習院女學部と音樂學校、そして理科大學に配付される處を、大學のが誤つてこゝに運ばれたので、楠本某なる日本中學出身の音樂狂が愛玩おくあたはず、つねに練習して、つひに、『春爛爛の花の色』だの、『あゝ玉杯に花うけて』だの、譜を作つたのだ。但し彼はあまり凝りすぎて學問が留守になり、三度落第して放校された——。この一高の名物男中でも新井源水君の如きは最も傑出したものであつた。

▲七十五人を投飛す

源水君は、一高入學試験に二度迄失敗した男であつた。三度目には氣がメイッで、

明日は試験と云ふ前夜も、頭が重くてならぬ、止むを得ず、清冷の風に吹かれむと、江戸川べりをブラリ〜してると、三人の木ッ葉俠客に突當られ、て、グイと足を踏まれた。由來彼は柔道の強者だが、無暗に鐵拳を振舞はす事を好まぬ、シカシむしやくしやの折とて、癩にさはり、三人共河中へタ、キ込み、之れで俄かに氣が晴々し、翌日の試験は常よりもよく、首尾よく入學したのである。

自治寮の源水君は半年ならずして名物男の中に數へられた、寒稽古は在學中精勤第一であつた爲め、メキ〜上達し、大學に進んだ時には四段になつてゐた。處が困つたのは二十八歳となり、徴兵猶要の期限が切れた事で、思ふ處あつて三年兵を志願したら美事合格、今更一年志願も許されず、どう〜鴻の臺の第十六聯隊の砲兵に召し出された。

教育ある身で新兵の馬鹿扱ひには、誰でも腹が「立つ是がシャツと言ふものである」ズボンはかうしてハクものだ」と來ては、人を愚にする甚だしい。更に小瓶



にさばるは上等兵の空威張だ。初めの間こそ國家權力に服従するのだと蟲を殺してたがある。寒い朝靴を磨げと云はれて『ペラポーメ、勝手にしろ』と小聲で吐かざるを得なかつた。

スルト不幸にも上等兵の耳に入り、直ちに拳固でスパンと見舞はれた。源水將軍大いに怒つたが、『今にどうするか見ろー』と其場は夫れで済んだ。

上等兵も跡でブリ／＼怒つて居る。『キャツ新兵の僻に生意氣だ、今にどうするか見ろとは乃公の云ひ草ぢや、』と、早速一分隊を提けて、夜襲と出かけたのである。

源水は澀やかなる還家の夢、荒々しき足音に破られて、ウヌ來たな奴さんと、暗きに潜むと知らず、ドカ／＼雪崩れ込むを得たりや應と、取つては投げ、取つては投げ、多年翌ひ覺へた柔道の秘術をつくして、苦茶無茶に叩きつけた。是で少しは腹

が癒へたが、破れかぶれ、刷毛つひでに手並を見せんと、其夜廊下に立つて、通る者あれば、誰彼の別なく投げ飛ばす、其數實に七十餘人、勇名一時に轟き、法科大

に幅を利かせて居るさうな。

學生で四段なる事が知れたわつたので、投げ徳のお小言なし。今では兵營内で大いに幅を利かせて居るさうな。

### 天下を相手に相手を取らんとする痛快書生

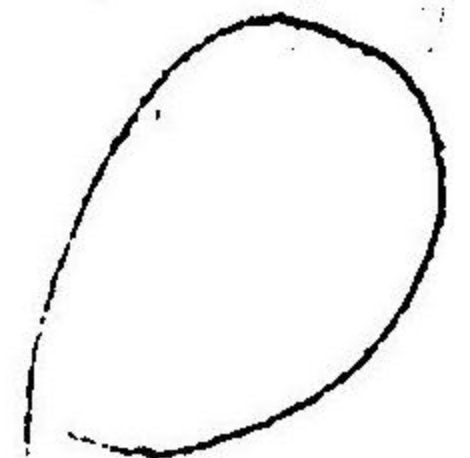
#### ▲キンツバを七十たべる

生存競争日に月に劇しく、人は膽ツ玉も身長も小なくなりゆく今日。巨人あり、六尺二寸。體量二十五貫目を越え。臂力非凡、柔道二段と折紙がついてゐる。

諸君是を誰とかが爲す。東京高等師範學校唯一の大男、河津彦四郎其人である。彼は岸和田中學の出身也。喧嘩では一校六百の生徒、その右に出づる者なく、大

食の爲めには、寄宿の賄方。オハチを抱へて泣いたさうな。

角力界の名士常陸山、彼の骨格を見て、垂涎十丈、われ如何にもして斯かる弟子を得てしがなと、あらゆる法を講じたのであつた。曰く、必ず大關にしてやる。曰





く、給料は破格で、これくやる！と。シカモ彼れは頭を振つて應せなかつた。ナ  
ゼであらうか。

彼れ思へらく、角力は快技なりと雖も、尙ほ一人、一人を相手として勝負を争ふ  
に過ぎぬ人生はただ五十年いかに努むるも相手とする数は知れてゐる。それよりも  
面白いのは學問で、智を磨き、徳を積まば、天下萬人は愚かな事。古今の賢哲とも  
角力が出来る。是なりくと。即ち、回向院に行く身を小右川大窪の奥に投じて、  
師範學校生となつたのは、今より二年前。

彼れ初めは師範學校といへば、先生の卵ばかりで、善柔猫の如き、書生さんばか  
りかと思つてゐたさうだが、運動家の中にはズイブン快男子もゐる。彼は心合ふ誰  
彼と大いに動き、大いに食はんと誓を結んだ。

彼の大食は有名なものだ。キンツバを七十平げて、駄菓子屋の姿さんを驚倒せし  
め、モチ菓子五十銭を見るく胃袋に葬つたには、保證人も眉をシカめたとやら。

イヤ、まだこんな例は澤山ある。自炊せる兄妹の友人を訪ふた折、一寸風呂へ行  
つてくるから、君、めしを焚いておいて呉れと、松茸めしの一升入のかまを托され  
た。出来上つて一寸ツマンで見ると馬鹿にマツイ。こんなものを遺しておいては失  
敬に當るワイと、飛んだ處へ禮義を守、一粒残さず始末を付て仕舞つた。  
とも知らぬ湯あがりの兄妹、歸つてきてオハチの蓋を開けて顔見あはし、

「オヤマア」

「アラマア」

と叫んだ逸話もある。

牛肉で有名な本郷の某店で鍋をツ、いて興に乗じ、十六人前を失敬し、サテ飯と  
云ふ段には、腹がクチくて、チョツピリたべて歸つたと云ふが、夫れでも驚勿五  
人前！

▲海中で大蠻勇を揮ふ



昔から無藝大食といふが、彼は大食するが有藝である。前述の柔道二段の外、擊劍も、フットボールも、野球も次撰手位はやる。テニスも名人であるけれども、力強さに過ぎて大抵のラケットは一週間で叩き折つて仕舞ふ。不經濟だから、自ら勇退したのである。

水泳はすでに免許を得てゐて、立派な先生だ、一昨年は房州北條の水泳場の教官で、あつたが昨年は堺の濱寺で、大阪毎日主催の海水浴場の教官となり圖らずも武勇をあらはした。

東京ではソンの事はないが、大阪では高等商業は非常に幅を利かしてゐる。さればポート部の撰手は、大海狭しと漕ぎまはつて、威張るのださうな。

ある日濱寺へ来て數日滞在したが商業生中彼の水泳場の區劃内に自在に出入して、何と云つても聞かない、彼はオトナシイ性質だが、此時ばかり憤然として怒つた。

「君達はけしからぬ。コツクスンに云ふ事がある。こゝ迄で来い」と叫べは、不敵

の一人、力白慢と見へて、「俺が行く」とばかり、ノサバリ出で、ジャブリク、淺瀬をわたり来る處を彼は近よつて、細からぬ首ツ玉ムツと驚づかみにし、「何しやるか」どもがをく少しも動かせず、鐵拳雨下する一舉に十幾ツ。流石の男も堪り兼ねて、無理に振り切つて逃げ出せば、ポート連の周章鼎の初くが如く、弱者いちめは卑怯だぞと罵りながら、沖へ逃走せむとす。彼は尙ほ怒つて、然らば一同を對手にして呉れむと、拔手を切つて急ぐ事、陸行く如く。泳ぎ近づいて、

「卑怯とは誰が云つたか、サア何人でも東になつて来い。恐れやせんぞ。それとも潮水が呑みたいなら、ポートをひつくり返してやらうか」

船上の一同縮み上つて、頭をペコペコさせる。ポートも浪にゆられてペコ。陸では少年連の歡呼、雲の峰を吹き崩さんばかり、其後といふものは、濱寺一帯の地、彼を仰さるものなく、七人組のゴツキも一目置いて、勢威隆々たるものがあつた。

彼近頃、潮風生の宅に来つて曰く、「來年は僕も二十三になる。來年は益々勉強し



て、智力と腕力と併行さす決心ぢや』

ど。實に賛成だ。世上幾多の怪力學生も彼を眞似してもらひたい。

### 弊衣破帽で百圓の買物

▲紙幣を焼いた奇男子の貯金は何の爲?

名を出して呉れては困ると、頻りに頼むから、とMTと假名を用ひておく。現に東京市の警部として令名ある人の書生時代だ。

明治大學の前身イギリス法律學校の夜學に通つてゐたが、寒月冴て、から風骨を噛むが如き冬の夜などは、駿河臺下で、一錢焼芋を買ふを常とした。ホントウならば六斤のものを毎晩だからと、爺さんのオマケで、七片呉れるを、三片は腹中に葬り、残りを二片づゝ兩わきにかゝへて、暖を取りつゝ昇校するのであつた。受持の教師は日々注意してると、どうも懐から湯氣が上る様だ。問ひたいすと此の顛末、

大層感心して、書生に來い。参りませうといふ相談整ひ、其後は左程苦しくなくなつた。

彼の成蹟は中の下位であつたから、卒業しても司法官には見込みなし。ソコテ警部を拜命し、役目大事に勤めた故、ズン／＼昇進した——と聞き込むだ、同窓の有造無造、押しかけてきて、

「オイMT、オゴレ／＼」と騒ぎ立つれば、彼れ大いに怒つて

「貴様達は何だ。乞食の様に食ふ事ばかり考へて！金が欲しけりや呉れるから、サツサと持つてけ」と一圓紙幣を二三枚投げ出した。一同モジ／＼してると、

「意氣地なしめ。取れなきやこうするわ」

と、片つ端から引き裂いて、火鉢に投げ込んで、青い煙にして仕舞つた。

日常萬事がコンな工合ゆへ、自然友達も少い。友達少ければ、雜費も少くてすむ。僅かながらも月給は残る。彼は精出して貯金する、何んの爲かと云ふに、同俺の甲



には金さへあれば、酒を買ふもの、藝者を買ふものもあるが、彼は本を買はうと決心したからだ。かくて元利合計百圓に達した夕。神田の某大書店に入つた。時は十二月なるにムギハラ帽に袴の重着。三年間も煮めめた様な兵子帯しての御入來には、丁稚は勿論主人番頭まで、バクリさうな曲者と注意したのであつた、處が豊岡らんや、あれもお買上、是もお買上、揚句の果が、百圓紙幣で御勘定とさては、正に福神の舞ひ込むもの、道理で昨夜の夢が善かつたと、ヘーコラヘーコラ。下にも置ぬもてなし振り大八車に満載して、九尺二間の茅屋まで、エンヤラヤツとお届け申した。

彼れ其夜は寝もやらず。あちらの表紙を開けて見たり、こちらの口繪を眺めたり

—鼠君はモウ灯が消へた頃と出張に及んだが、この有様に驚いて

「チユー、々々々、今夜は勝手が違ふわい!!」

## 十五年間尻から一番の及第

### ▲小學から海軍機關學校まで

小學から大學まで、頭から一番で卒業した者を秀才とオダテあげる世の中では、小學から専門學校の卒業まで、ピリから一番で押し通したら何といふ稱號を呉れるのであらうか。

讀者は必ず問ひ玉はむ。ソソ奇抜な人がありやと。然り、あるから不思議だ。現に常磐艦の機關少尉なる、名から大曲太郎は、幼小より頑健、ピリから一番で—その僻一度も落第せず。輕業の様な危い成績で、機關學校三年生に及んだ武運つよき、否、學運強き人である。斗酒敢へて辭せぬ豪酒家、洒々落々、男らしき男なり。

大抵の奴は青くなり、赤くなる卒業試験にも悠然と構わてゐたから、豫定の如く



答案が書けぬ。何、後學の爲めに一度位の落第すべいと、筆おつとつて、さらさらと流れ書きさせるは、何が何やら、自分でもわからぬ珍怪三十一文字

咲かぬなら咲かして見せう山ざくら

但試験の花は咲くまじ

と。某教師その意氣を愛して、願の如く尻から一番で卒業させたさうな。

### 奇談三副對

#### ▲禪一本で講道館へ亂入

臺灣協會の松井某と云ふ荒武者、柔道も擊劍も出來ぬが、喧嘩に強いこと天下無敵、嘗て押川河野等の野球界名物男と打れ連れ本郷通りを通行し、帝大の柔道有段者十數人を相手に喧嘩をオツ始め、目茶々々に投げられた。スルト彼は店前にあつた腰掛臺を取つて無茶苦茶に振廻し、手が付けられぬ。押川、河野の兩君は柔道

家連中を知つて居るので仲裁に入り、其場は夫れで納まつたが、松井將軍口惜しくて堪らぬ、其翌日午後四時頃、講道館で稽古の真最中、禪一本で道場へ突入し、サア昨日の奴出て来いと、胸を叩いて仁王立、まさか一人を袋たいきにする譯にも行かす、之れには數十の柔道豪傑連も閉口し、漸く宥めて歸した相だ。禪場一本で講道館へ暴れ込んだのは天地開闢以來此男一人だらう。

#### ▲奇智ゴロツキを走らす

高等商業生の山本某といふヒヨロ長い男、三田の淋しい通りで、闇夜にゴロツキに出會ひ、殴られさうになつたので、先生一世一代の智愚を絞り出し、「貴様等は慶應義塾の六段、藤田大良を知らないかッ！」と大喝すれば、相手はビツクリ仰天し雲を霞と逃去つた但し六段藤田大良とは出鱈目で御座る。



▲戸外に奇妙な聲あり曰く

ルーズベルト言行録と云ふ書を譯した、加藤漆花といふは、早稲田文科二年在學生だ。彼れ笈を負ふて上京したみぎり、サテ何處の學校に入つたら好かと、下宿樓上で思ひ惑つて居る時、戸外に聲あり、

「ワセダアハイレー」と。二たび三たび叫ぶので、障子をあけて見れば、汚い老爺一人、下駄の齒入れ道具一式を荷うて、「足駄ア齒入れ」と叫んで居るのであつた。彼れ思へらく、天に口なし、人をして云はしむ、これ正に神のお告げなりと早速早稲田に入學して今日に至る。

悪僧釜うで物語

▲儀で體操

京都のある寺に破天荒に愉快な禪僧が居る。寺の名は「ダイセン寺」と呼むださうな。小杉末醒君が自分であつたのだからウンでは御座らぬ。假に大泉寺と字をあて、おく、惜しい事には名も聞いて來なかつた。シカシ六尺三寸と尋ねれば彼等の仲間では知らざる者は恐らくはあるまい。身の丈實に六尺二寸七分也。如何にも血の氣が全身の端から端まで行き渡つた猛漢、四斗俵を一つづつ、兩手に握つて、吾々宛かもサンドウの鐵座鈴を握り舞はすが如く、オー二。オー二。ウンコラセ。ウンコラセとやるのが十八番の隠し藝である。

大泉寺に一人憎まれもの、坊主があつた。糞力のあるを鼻にかけて、人を見る事糞蟲の如く、隠險なる猿眼を光らせて乃公が居らねば日本が潰れると云はんばかりの顔をして、何かと云へばヌグ蝶螺の様な鐵掌に臭い唾をヒツかけて、さあ來いと身がまへる。理屈に強い奴に限つて腕力に弱い。だから回まされて仕舞ふ。奴さん益々得意に威張り出す。苦々しい次第である。



ある秋晴の朝、ふとした事から此悪僧は、我が六尺三寸君に喧嘩を買つた、イヤまさかに喧嘩は買はなかつたが、例の力自慢をおつ始めて、乃公に勝たん者京阪神に一人ありやなしやと腕を叩いて廣言を吐いた。六尺三寸君は最初こそ酔つばらいの縁言と同じ様に、フ、ン左様かと、受け流して居つたが、元來面憎い奴也。此機會を利用して、とつちめて呉れんと思つたので、向きなほつて、

「オイそんなら一番角力を取らうか。」

と戯言半分に云へば、

「面白い今でもよい。」

と、黒い腕を撫でる。

「シカシ無價ではいやだ。」

「何、金を懸けるのが。よからう。どうせお前が負けるにままつてゐる。氣の毒だから五圓にしておかう。」

馬鹿め、僧侶たる者が賭博に類する事が出来ると思ふか。」

「イヤ賭博ではない。懸賞金だ。外國にも例の多い事だ。」

此悪僧なかくヒドい奴ちや。六尺三寸君呵然として笑つた。

「乃公は金は不賛成。一つ他の賭をしやう。負けた者をこの釜の中へ叩き込むで、

焚き殺すがよいか。賭は賭でも命賭けだ。」

「ツー。」

と悪僧 狼の如くうなつたが、騎虎の勢ひ、何條今更凹まれんや。

「よし。負けた時に吼え面かくな。五圓の金を十圓にするよ云つても許さぬぞ。」

と暗に汝敗れなば十圓で許してやらんと謎をかける。こちらは磊々落落々、大悟せる禪僧也。ソンの事は何でもない。

▲鮮かなものだよ

「乃公が負ければどうせ命がないのだ。金の十圓や二十圓は此の首につけて進上す



る。お前も敗けたら煮込になるのだ。遺言があれば今の間にしておけ。」  
「何を言ふ、汝、何を言ふ。サア来い!!」

と腕をとつた。此時まで興ありげに問答を聴いてゐた七八人は、面白いやれ〜と叫ぶあり。喧嘩はよせ〜と仲人ぶるあり。桶の中にて芋を洗ふが如く、ゴロ〜ガヤ〜秋風に刺り立ての坊主頭を光らせて騒いで居る。委細かまはず二人は眞ッ裸になつて躍り出た。

「サア来い!!」

「命懸けだぞ!!」

二人は岬を負ふ猛虎の如く相對したが、行司坊主の手を引くともろとも電光石火! ムンツとばかり四ツに組むだ。まことにいづれ劣らぬ怪力なる哉。兩人四本の足は、地から生へた如く、しばしは動かなんだが、何條六尺君の怪力に敵すべき、四斗俵を手玉に取るお手なみで、ウンと押して、こらへる處をグツと引きつけ、また

押しかへした早業眼にも止まらず、檜投見事さまつて悪僧は、ズンデンドウとホウリ出された。

片唾を呑んだ一同は覺わすワツと喝采した。勝負の鮮かであつた事は無論だが、その外に別の意味も含まれてゐると思はねばならぬ。別の意味とは何ぞや。横暴壓制なる彼が、その自慢の力くらべして天狗の鼻をおつべし折られた一事である。

砂にまみれて團子の如くころんだ彼は頭のテツペンを擦り剃いて、變テコな面となつた。秋空高く照り輝く秋の日を仰いで大笑したる六尺三寸君は此時凍とした聲音で、

「さあ約束ちや。此釜へ入れ!」

と命令した。傍らに釜は逝く秋の庭に冷やかに横はつて居る。

「困る。困るよ君。釜うでの懸賞はホンの戯言ぢやないか。」  
倒れたる悪僧はうめくが如く云つた。



「チエツ！ 卑怯千萬な！ こうなるからは強制執行だ！」  
 六尺三寸君は鐵腕に彼の首すちを捉めた。彌次馬坊主連も手とり足とり、釜の中へ投げ込んだ。六尺三寸君は蓋をして、ドシン／＼と大石を二三個其上に置いた。  
 「オイ水を汲んで来い！」  
 よろしいと、平生いぢめられた先生達大喜びで、坊主頭にねち鉢巻。バケツ、手桶を提げて汲むわ／＼。

▲獨りで糶り上げである

六尺三寸君は蓋を少しにちらして、その隙間から水を注ぎ込む。中からは先生大聲あげて、オオイ勘辨して呉れ奢る奢るとぬかす。このケチンボ野郎が奢ると云つたさて、恐らく南京豆の二三十錢も買ふのが關の山だらう。そんな事に頓着なく水を注ぐ程に、餘程思ひ切つたと見へて、三面出すと言ふ。やがて水は六分目ほど入つた。いよ／＼火を焚く段だが、普通の薪では音がしないからと、わざ／＼古竹



小杉米屋



を集めて来た。

釜の中では煩悶最中だ。四圓出すから御免してくれ。イヤ五圓、イヤ六圓と、獨りで耀り上げて居る。そのうちに火の準備成つたものゝまさか釜の下で燃すわけに行かないから、ズツと離れた方へ焚き始めた。バチン！バチン！バチン！と威勢よく竹の裂ける音が轟く。今にグラ／＼煮立つと思へば、奴さん氣が氣でない。

「九、九圓出すよ。助けて呉れ、あゝ苦しい。

と成程如何にも苦しうだ。

バチリツ！バチン！！／＼と竹は爆列する。

「十、十圓——十圓出す。御免だ／＼。」

とう／＼十圓迄奮發した。實に水の中では七轉八倒だ。外では一同手を拍ち、足を踏み鳴らして痛快を叫ぶ。



そのうちに釜の中では熱いくと泣聲を立てる。何も熱からう筈がないのだが、それが所謂神経作用で、釜の下で火を燃してゐると思へば、尻が焦げつく様に思ふのである。あまり庭が騒がしいので座主の坊主が馳けつけた。

『お前達は何を野蠻の真似をすツか！』

と叱る。一體此座主も頃の權柄面をする憎まれ者だ。氣昂り血熱する一同が快よく此言葉を聲かう道理がない。

『こいつも序にやつつけろい！』

と打つてかゝつた。いくら座主でも釜へ投げこまれてはたまらぬ。氣違ひの如く逃げ走つて、大和尚を呼んで来た。いくら皆なが騒いでも、白髯を秋風にそよがせて、炯々たる眼光人の肺腑を射る如き、此の高徳の坊さまにはかなはない。

六尺三寸君は微笑を含んで経過を物語り、蓋の上なる大石小石を取除て、中なる悪僧をツマミ出した。哀れや悪僧全身直赤になつて、茹銷の如く氣息庵々として地

上に横はつた。……が、火が釜の下で焚かれたものでない事を知るや、急に勇氣をとりなほし、五體の色も奮に復した。これ嘘に似て嘘にあらず。人間の精神作用が奈邊にまで働くかのよき一例である。もつと捨て、おいたら、悪僧は水の中にあり乍ら煮殺されたと同様の最後を遂げたに相違ない。邪惡を唾棄して壯快に興する、大和尚は洒然大笑されて、六尺三寸君を褒めたとの事である。

### 米の飯食ふ女に惚れぬ蠻骨漢

#### ▲ニデモが氣に食ぬ

有名なるチンブン漢、川崎勇太郎今年二十七歳にして、好配なく、洒々落々たる蠻骨で澄してゐる。故やあらんと聞いて見ると、彼れの曰くサ。

「僕は一體女の顔を見るのが嫌ひだ。第一あの媚る様な誇るやうな歩き方が癪にさ。はる。白粉をベタ塗にして、ゲラ／＼笑ふ。いやもう、ヘドが出さうでならぬ。親類



に僕の理想にかなつた女があるなら貰つてやるなご、大きな口をきく奴があるから、デワあれをお世話を願ふと、一人指定すると、先方ちや僕に呉れる必算ちやないんだ。呉れなけりや、貰つてやらんぞと力むでると、方々持ちあるいて、皆な破談になつた曉一仕方がない、勇にでもやれ」と云つたさ、馬鹿め、にでもたへ何の事ちや。乃公は一言のもとにハネつけてやつたよ。一生無妻主義で通す氣だ。高い米の飯を食ふて、糞にして出す女なんかに惚れる奴は馬鹿だね君！」

### 馬鹿踊りして禪を垂らした吞氣者

△體操教員をコロがす

友、新井君に、君の事を投書するが、かまはぬかと云つてやつたら、夫れは面白、ハツキリと姓氏を記るし出損ひのない様に頼むと返事が来た。

新井君名は良一。幼にして神童でもなんでもない。たゞ一個の腕白小僧として一

しよに龜岡の高等小學へ通つてゐた。體操の時間に、步調不活潑なりとて、受持の山形先生に靴で蹴られやうとした。あぶなく弱腰の邊をやられる處を、双手で受けて、高く引き上げたものだから、五尺六寸の先生スツタンコロリと雪中にころげると同時に新井はあとを見ずに駆け出して家へ逃げかへつた。

翌朝、平然として登校の途上にあると龜岡橋の上で、長靴に手をかけて、事ありげに悶てるのは昨日の山岡先生だ。何食はぬ顔でお早うと禮すると

「お、新井か。乃公はなう。今んま黒犬めが吠へたから蹴り飛ばしてやつたら、咬みつかれて困つてる處ぢや。綱帯したいから、靴を脱がしてくれ」

地獄の亡者、佛陀にあひし折もかくやと世にも嬉しさうな顔で頼んだ。ぬがせて見ると、足の先から、黒血がタラ〜！こゝに於てか新井は呵々大笑して

「先生は昨日私を蹴つてコロげ、今朝は犬を蹴つて咬まれたのですねエ！」

山形先生はニガい顔をして居つた。その後は新井にだけは大抵の事は小言を云は



なくなつたさうな。

▲酌婦を裸に剥く

彼は中學では、奇人、痴漢、ウスノコなど、有難からの異名を賣り進んで高等學校に入つた。シカシ相變らず昔ながらの呑氣男。ある懇親會の席上で、巡盃酌するの時、酔つばらつて舞ひ初めた。

「あたら賢き人の世に。こわ面白き馬鹿をどり——」  
と歌ひ出さうとすると、灰色の褌が、長く壁に垂れる。下作な酌婦がその端をチヨイと引けば、ストンと落ちた。一座の拍手湧くが如く、障子も襖も吹つとびさうな大笑ひ！

彼は勃然として怒つた。物をも云はず酌婦を捉へ、泣き叫ぶのも平氣にて、九裸にし、腰巻引さいて、汝蛆虫早く死ねと大喝した。流石面の皮あつき酌婦も赤くなり、一同は酔も醒も青くなつたさうだ。

彼や年なほ若し、大器晩成と云はぬばかりの顔して、徐ろに勉めて居る。日東快男子の一人たるに耻ぢすと謂つべしぢや。

借馬に崇られた拔作君

▲泰出居士日課表

- 一、日曜日……友人を訪問して快談大笑する事
- 一、月曜日……友人を呼び集めて割れる程騒ぐ事
- 一、火曜日……父母の手傳ひをなし農業に従ふ事
- 一、水曜日……終日讀書の事
- 一、木曜日……深山幽谷跋涉の事
- 一、金曜日……水泳擊劍を獨習する事
- 一、土曜日……馬術練習を積む事



こんな奇抜な表を楣間に掲げて、昨年の暑中休暇に實行したのは、甲府某校生伊藤泰山なる、フランクリン崇拜者である。大抵の日は表の通りになるが、土曜はチト難物だ。草木に露の宿つてる頃飛びおきて、お定まりの冷水浴を済まし、馬車屋の瘦馬借り出してヒラリと飛び乗る。サア是からが大變。登りくる太陽の金色の光を身に浴びながら、ダクを打たせて揚々と出てゆく先は一里四方の廣原野。可憐の農夫は早や鋤鉄を手にして働いてゐる。大道に出づるや、彼は鞭も折れよと瘦馬の尻ツベタを亂打した。馬公驚き疲風の如く馳け出せば、鞭くだる事いよく激しく、馬の奔驅いよく急なり。呆れ驚く、百姓を冷かに見やりつゝ、野良を往復する十數回。馬の噴く泡、鼻づらを埋め二進三進も動かす相なつた。

云ひ甲斐なき奴めと、更に滅茶々に尻をなぐれば、ヒーンと叫んで棒立になつた、その名に似合はす泰山先生。スツテンコロリと落馬をすれば、ザマ見ると云は

ぬばかりに、畑の中を縦横無盡と駆けまわる。百姓共は騒ぎ立ち、ホーイホーイと追へごもく、東に走り、西に駆け、麥も米も、玉蜀黍も、四つの蹄にかけて滅茶苦茶に躑躅し、二時間の後捕つた。泰山君八方よりお小言……こんなことが度々あつたさうな。但、今は騎馬の名人となつてゐる。

### 自稱弘法大師の怪氣焰

静岡のある小学校の土屋なにかしと云ふ坊様の子。弘法大師と自稱すれども、面白此上なく、常にクルクル坊主の青光りする頭を振り立て、讀本を讀む。その節がお經そつくりなので、何度も注意されたが、直さない。夏になると、何々居士、何々大姉と書いた白地の着物許り着てくる。蓋し、施主が納めた葬式の幕や何かの寄せ集めなのでだ。小膽の教師は氣にかけて一參觀人があつた時見慣いから、他の着物はないか』と注意すると、大師さん丸い目を三角にして、僕は坊主になる男で



す。坊主が葬式に使つた幕を着て悪いと云ふ様な郡親學さんなんか免職さしたらよいでせう。尤も白地でイケないといふのなら、明日から金爛の袈裟を着て参りませう！』と年に似合はぬ怪氣儀、夫んな事されては溜まらぬ先生謝罪して、一件はお得めなしとなつた。

### 汽船を泣かせた腕白の寺田

#### ▲校長の頭へ福は内豆

寺田と云へば、ハ、アあれかと合點せぬ者なき、千葉某中學の亂暴生徒、氣が短かくて力持ち、女が嫌ひで、イタヅラが好き……と、一風變つた明治桃太郎で御座る。

是は小學時代の話だが、二月の節分の朝、學校通ひのカバンが大層ふくらんでゐる。何だらうと思つてると、教員室へ飛び込むが早い、カバンの中から、豆をつ

かみ出して、ストロブの傍で雑談してた教師連めがけて「福は内、鬼は外——福は内、鬼は外」と大豆を撒いた。新聞讀んでゐた校長先生の頭へも、夕立の様な大粒がコッシーコッシーと夫れでも一同小言も云はなんだ。寺田は其足で各教室を廻り、男生の室ならば、あたりまへに云ふが、女生の室だと、聲はり上げて福は外、鬼は内」とドナつて驚かした。

#### ▲江戸川汽船を泣かす

彼が中學生となつた頃の夏休み！

江戸川で泳いでると、一町ばかりかなたから蒸気が安い石炭の煙を吐いてやつてきた。こは面白し競争せんと、近づくを待ち、併行になつて、抜手をきつて泳ぎ出す——所が天下にはイタヅラ者が多いものと見へ、誰か小便をヒリかけた奴があつた。寺田大將怒つたとも、早速船側の繩を傳つて、飛乗り、小便の主を半死半生になぐり、他に知る人あらざりしを幸ひ、手ばやく汽笛の綱を引張つて、煙突へしば



りつけ、さつと水中へ躍りこむと、網が引かれてるから、ボーくボーくと閑な  
しに鳴なつてゐる。寺田前後を顧みて拍手一番、

「ヤァー、團體の大きい汽船が泣き出したワイ!!」

▲お禮に生殺しの青大將

又かつて、上級生の數名が、ボートで寺田の前の川を通り過ぎ様とした。寺田は  
夫れと知りつゝも、

「人の家の前を黙つて通るのは誰ぢや〜」すると、向ふでは「生意氣を云ふな。

此川は貴様一人の専有物ではないぞ。貴様は三年の寺田だろ。學校で頭をなぐら

れぬ用心しろ」とサツサと行つて仕舞つた。寺田は大いに癪にさはり、あたりの夏

野かな青大將を五匹ばかり取つて來て、死に切れない位にして、コモ包みとし、ボ

ート連の歸りを待つてゐた。

そんな事は夢にも知らぬ先生達、二時間あまりして、彼の家近くまで漕いでくる

と、板の上へコモ包の乗つかつたのが、ブクラ〜流れてくる。オールで掻き寄せ  
て見ると

「速かに此包を開きしものは幸あらん」

と書いてある。幸どころか、實は此時蛇は水を呑むで生き返へつてゐたのだ。欲

深共、ざれ〜と拾ひあげて開けると、豈はからむや、鎌首あげた青大將五匹。ツ

ウイと水へはいつて、向岸へわたつて仕舞つた!

「ワッ! ブラブ! イ!!」

連中一同慄へ上つた時。遙かに大喝するものあり。

「萬歳〜。パチがあたつたぢやらう!」

と、蓋し是寺田であつた。惜い奴やナグチマエと、ボートは矢の如く進んでくる。  
彼も夫れ位の事は心得てゐる。取つておきの牛の糞をシタ、カあびせかければ、ハ  
イカラなボートは忽ちにして肥船と變つてしまつた。此日の戦は大勝利、寺田額を



叩きつゝ、「楠正成に見せてやりたい〜」と。  
その無邪氣なる概ねかくの如し

### 翠丸演説の効果

▲この陰毛を見よ

今を去る事六年前、水戸師範で校長排斥運動があり、硬派と軟派とは分れ大騒ぎであつた。學生は二十五六歳のが多く郷里に妻子のある者もゐた。この種の男は、浮世の風に吹かれた事が多いだけに、十九や二十の若殿原の様に活氣はない。退校さつれぬ範圍で彌次らうと、蟲のよい事を考へてゐる。そこで兩派の討論會を開く事になつた。

時は寄宿舎の物干の古禪を吹く風身に沁む初秋の晝下り。廣いグラウンドを會場とし、機械操用の柵を演壇として開かれた。二三駢辯を振ふ男もあつたが、例

によつて、平凡〜。皆様一向感服仕らぬ様子。處へ躍り上つたのは三年の村上なる名物男。ヘドハキ演説よせ〜と彌次る奴を「諸君、まづ聴け」と兩手で制しつゝ、

「諸君日本男子なら、コレがあらう!」

と股間をさぐつて掴み出したるは翠丸だ。彼は三四度打ちふつたと思ふと、十數本の毛をムシリ、指につまんで、口もとへ持つてき、フツとばかり吹き飛ばした。

「諸君、この毛を見よ。良く飛ぶではないか。又たよくアトに生るではないか。勿論今は痛いサ、夫れも瞬間である。又た痛くないと思へば痛くない。吾々の現境は實に此處だ。退學何ぞ恐るゝに足らんや。吾人は未來の大英雄を以て自ら任ずるものである。英雄主義には情實無し。校長にして眞に惡からば追へ復た後に良師來る事、毛の生ゆる如しだ。山本海軍大將の青年時代を鑑みよ。諸君翠丸ありや。翠丸あらば賛成せよ!」



此の怪演説の結果、全校一致で、排斥と決し、大ストライキをやり、大成功とはなつた。聞けば村上、今は某縣辯護士であるとか。此時の熱烈なる雄辯を想起すれば、日比谷の代議士の多数の演説は皆な屁の尻し。

### 後藤新平男爵幼時梨を盗み食す

▲當時の頑童、今は大臣

人の悪い仇討ちの事を犬糞的復讐など云ふが、人糞的復讐をやつた珍話を述べやう。

本題の主人公を誰あらう。現代の英雄と時めく蠻爵後藤新平氏で、マダ鼻たれ小僧なりし頃は、郷里水澤餓鬼大將であつた。將來大臣様にでもなると知つたら、多少オベカつる奴もあつたらうが、もとより解らう筈がないから、始末のつかぬ腕白として、近所では鼻つまみであつた。

氏の家は吉小路で、その一ツ隣りの新小路の素封家佐藤某の裏には、ステキに大きな梨の樹があつた。時候がくると、氏は毎日の様に忍び込み、梨下に冠を正す處でなく、幹をよぢ昇つて、手あたりばつたりモギとつて、盗み食ひをした處が悪い事は出来ぬもの。どうした事か、足ふみはづして、猿よりは少し可愛かつた新平小僧ドツとばかりに根ツ子に落下した！ (潮風生曰、その顔付は議場で質問に答へる時より、濫かつたらう……) 凄まじい物音に、この家の婆さん出で見れば、平生から憎い新平小僧だからたまらぬ。尻の痛みに走られぬ奴のを引つとらへて、散々油を搾つて放免した。氏は神妙な顔して聞いてたが、婆あ影が見へなくなると、ペロ／＼赤い舌を出して、腰を撫で／＼歸つて行た。

一週間あまり梨盗に來なかつたから、やれ安心と、胸なでおろした或朝の事婆さん玄關へ出て見ると、アーラ不思議、迂るほど磨きぬいた板の間に、コテ／＼と青糞がヒツてある。さては！と見やる門の外では新平小僧が、大口あいて笑つてる。



「こん野郎、不重寶をしたのはお前だな！」と、御大家の御隠居様の癖にあられない。手頭の小石を取つてポン／＼投げつければ、身がるの氏は左に右に外しつゝ、「婆アの石は横へ行く」

など、嘲つてゐたが、果ては、こゝまで御座れたの、赤ンベエだのして、悠然と引き上げて仕舞ひけり。

婆さま大いに口惜しがり、早速家人とも相談の上、氏の父君に直談した。當時巡查を拜命してゐた物堅い人だからたまらぬ。スグ此の腕白を膝下に呼んで、ウンと叱り飛ばし、その日は減食の刑に處すると宣告した。婆さまは満足して、白接頭を振り立て、歸つて行かうとすると、氏は恨みの眼光鋭く、

「婆ア覺わてゐろよツ!!」

と小聲で云つたさうだ。

次の朝例によつて婆さま門迄出て見ると、細暖簾に糞がベツタリ！手もつけられ

ぬ糞暖簾となつてゐた。

流石の婆さまも、まばらなる齒を嚙んだだけで、此上云つて行く勇氣もなかつたと云ふ事ぢや。

春風秋雨、こゝに四十年、當時の腕白、現代の英雄となりその言行は衆人の範と仰がるべき、男爵後藤新平殿とはなつた。げに人の經歷はごわからぬものはない。讀者諸君だつてドンなにエラくなれるかわからぬ。自ら輕んずる勿れ。自ら侮る勿れ。自ら愛し、自らを惜しみまたへ！

### 鐵拳神聖論者横行談

#### ▲古網の洗濯です

現に臺灣混成旅團の一等卒と云ふ高官に暇務中の太田三郎君は、洋装した名前だが、實はスバラしい蠻勇家だ。



彼、岡山中學に入るや、鐵拳神聖電光石火主義といふ長々しい主義を標榜して立ち、上級となく下級生となく、生意氣な奴は片端からお見舞申した。之を憎んで三十餘人で袋たゝきにせんと企てたが、反つてヒドイ目に合されたさうな。往來で車屋が「旦那、行きませうか」と勸めると「行きたきや、勝手にどこへでも行け」となる男也。

ある夏の日ざかりに、彼は校庭に、緋鯉真鯉潑刺たるを見、ひそかに垂涎三千丈、大枚一圓を投じ古網を購ふて悠々と這入つてきた。折しも日落ちて薄暮の時、納涼の彌次はワイ／＼騒いで、やれ出た、そら逃げたど大騒ぎ。生徒監の一教師が何かと覗きにきて見ると折りしも、ザンプと一と網打つた處！

「コラお前は何しちよる」と肩を捉へた。彼微笑して

「ナニ、古網の洗濯です!!!」

彌次喝采して頓智を賞す。

△試験場へ出及庖丁

彼の家柄は舊士族だが、あまり得意の位置でない。されば日々の服装も古洋服に牛皮の古靴が關の山——シカシ彼は耻ぢる色はない。ある學年試験には、ナイフを買ふに金無く、自炊用の出及庖丁を懐にして席についた。鉛筆が折れれば、夫れを取り出して削る。教員青くなつて詰る。彼只答ふらく

「金がありません」

公明正大な理由なので致し方なし。終に教師は震ふ手をさしのべて、自用の古ナイフを差し出し「これをやるから、夫れは廢せ」と云ふ、彼、直ちに投げ捨て、

「僕は乞食ぢやない!!!」

教師黙して又た云はず。

▲道鏡惡逆論するに足らず

彼は腕白であつた丈け夫れだけ多く、學課は不出來だ。然し四年級までは、輕業



の様尻から一番で押し通して落第はやらなかつた。が、さて五年に進まうとした時には、もう最後かと観念した程六ヶ敷かつた。

西洋歴史の試験問題に『アレキサンダー大王について知る處を記せ』とある。一向わからぬ。儘よと『大王は古今無双の偉傑也。その性行や實に荒れ来る雷の如し』とやつて退けた。作文問題に『弓削道鏡を論せよ』とある。こいつも面倒と『彼や悪逆無道論するに足らざる也』と書きのめした。

職員會議で非常に問題になつたさうだが、その才氣を愛する先生もあり。無事に卒業した。校長から卒業證書を恭しく頂いて、苦笑すらく、

『五年の辛棒タツタ紙一枚の事か！』

夫れでも嬉しかつたと見へ、校門を出るや否や魚花なる飲屋に登つて、一晝夜の牛飲馬食——無論女など座には置かなかつた。

▲西洋人の妾と鐵砲の種類

彼かつて暇を得て神戸に遊ぶ

外人居留地を漫歩するに、日本婦人が外人の妾になつてゐるを認めて、憤慨

おくあたはず、鐵腕を叩いて、

『今に見よ、西洋婦人を俺の妾にして呉れるぞ』

と心ひそかに誓つた。

鐵兵検査の際、砲兵を志願した處、検査官なる某少佐問ふて曰く

『汝は鐵砲の種類を知れりや』

『ハイ 鐵砲には三種あつて、火繩銃に村田銃に、小生の様な無鐵砲とがあります！』

是で美事に素志を貫徹した。

兵隊が濟んだら大飛躍をやるよと云つてゐるさうぢや。

雨敬を説破した奇才子



▲天下の雨敬に面會

早稻田大學邦語政治科、明治四十年度の得業生に、香取吉萬といふ奇書生が居た。身の丈は四尺七寸に満たず。當時僅に廿三歳であつたが、元來が才氣縦横の男として、親分に天下の雨敬をカツギ、大いに活躍して呉れやうとしたのであつた。不幸、志、中道にたがつて失敗したが、成敗はもとこれ時の運、ベストをつくしてシクジつたのは俯仰して天地神明に耻ぢぬ次第ぢや。今、記すのは重に雨敬と初對面の顛末である。

彼の故郷は静岡縣下の掛川在である。五歳父を失ひ、十一歳母に逝かれ、よるべなき孤兒として生ひ立つた。尤もその材幹を愛して某名家の家庭教師に採用されたから、普通の苦學生の様に、夜も明けぬうちから、ガラ／＼牛乳車を引つぱり出し

たり、泥道踏んで夜遅くまで夕刊夕刊と呼んであるいたりしなくともよかつた。糞勉強はせなんだが、つねに級中の秀才を以て目ざされ百數十人中三四番で卒業した。卒業すれば紳士様ぢや、但し、金は一文もない。どこかへ奉職してパンにありつかねばならぬ。フト思ひついたのは雨敬の事!!

雨宮敬次郎氏は其頃相州片瀨に居たのだ。紹介状がなければ一面識のない者に會はぬとは聞いてゐるが、成算すでに胸にあり。當つて碎けるぞ出かけた。

彼は小膽の男でない。けれども、サテ今から天下の雨敬に談じ込むで、首尾よく備はれやうとするには、よほど落ちついて、相手を呑むでかゝらなきやならん。處が別荘へ近づくに従つてドキ／＼胸が躍るではないか。イカン／＼これではイカン。一ツ江ノ島界限でも散歩して動悸を鎮めやうと、歩いてる間に、とうとう江ノ島を一周して仕舞つた。

心も静まつたから、そこで片瀨へ引つ返し、雨敬の大きな玄關へ大きな聲して、



「頼まう！」

時刻は丁度六時過、前裁の油蟬も鳴きやむ閑静な別荘の夕ぐれに、エラさうに訪なうは誰様かと、取次の書生恐る／＼出て見れば、何の事だい。自分より見すばらしい書生が立つてゐる。用事を聞けば、雨宮サンに面會を願ふといふ。どう斷つても折角きたのだからと云つて歸らない。

仕方がないのでだれかの妻君らしいのが出てきて、病中であるからと優しくなだめて遠ざけやうとする。放つ拂はれてはたまらぬ、彼はいつ迄待つてもよいから一寸逢つて下いと、争つた。その熱心に根まけして、兎も角も上れといふ事になつた。サア是からが活舞臺ぢや。

▲金ツバ賣りになれ

二十疊敷もありさうな間へ通された。

何一ツ裝飾がないから特別にガランとして感じられる。中央に叩けばガンと鳴る

様な岩盤な木製テーブルを置き、大椅子には雨宮氏が大胡坐をかいて空嘯いて居るこれが雨敬式といふのだらう。

「オイ、何にしに來た」

「お願いがあつて参りました」

「どんな願ひか？」

「使つてもらひたいのです」

「他人に使はれるより獨立しろ。金ツバ賣りにでもなれ！ 一日に五十錢は儲かる

せ」

「無教育ならば夫れもよいでせうが、ワザ／＼大學卒業してやる迄もありませんま

い！」

「一體ナゼ乃公の處へ來たのだ？」

「同じ使はれるならば、ケチ／＼した人は御免です。貴郎の様な太ッ腹の豪傑に小



言を云つてもらひたいのです!」

「お世辭を云つちやいかんぞ」

「イヤ世辭ぢせないです。衷心の告白です」

「年齢はいくつ。學歷はあるか」

「二十三歳で早稻田の政治科卒業生」

「…………一本調子にきた破天荒の回答は。こゝで波瀾を生ずるに至つた。雨宮氏は

早稻田と聞くや急がはしく兩手を振り、

「駄目だ。早稻田は困る。役に立たない。オレが使つてる中に早稻田は一番成

績が悪いテ」と叫んだ。普通の男なら恐れ入つてシヨゲ込む處なれども、彼は昂然

として母校の爲めに辯じた。

「コレハ天下の豪傑のお言葉とも思へません、早稻田は玉石混淆である。尤も石の

方が多いに違ひないが、仲々立派な人物も乏しくありません。貴方の方へは折悪し

く屑ばかり集つたのでせう」

雨敬先生苦笑しながら、

「ちや、これを讀んで見い」と寛やかな懐から取り出したのは雑誌太平洋だ。自分

の談話が載つてゐるのを讀めと云ふ。よろしいと彼は、朗らかに讀み上げる。雨宮

氏は眼を閉ちて黙然と聞いてゐるが、統計の數字など讀み誤ると、違ふくと云ひ

ながら、一々訂正する。病中など云ひ乍ら、頭は中々クリアなものだと感心し

乍らどうやら讀み終つた。

雨敬氏はしばらく黙つて居たが、

「時に月給は何程要るのだ?」

「いくらでもよろしう御座います。シカシ食へるだけは頂かねばなりません」

「よし心得た。書生に番地を知らして歸れ」

▲破格の扱擡を受く



越れて數日、八日の晝過ぎ、一片の電報は飛んで彼の下宿を驚かした。明早朝片瀬へ來いとの事である。すると其晩が未曾有の大雪だ。電車は不通、電線は切れ、踏み込めば脛までもある始末、少し位違約しても言ひ譯は立つのであるが、彼はチヤンと朝ッ原から詰めかけたので、大いに寝められ、こゝに改めて大日本軌道會社の見習ひに採用せられ、當分は會社へ行つて保線、庶務、會計など何でもかまはぬ物を覺ゆる事を心懸ける。もうよいと自信のついた頃にはやつて來い。乃公が試験してやる。と云ふ風な訓話を受けて、軌道會社へ赴任した。大に智能を働かして萬般の設備を見てとり、片ッ端から申告書の材料として雨敬に送つた。どこか見處があつたものと見れて、一ヶ月ならすして破格の振擡を受けて、庶務會計主任に補せられて、社長の次席となり、同期卒業生の人々と遙かに段が違ふ様になつた。

▲沿道の壯士を鎮撫す

諸君も御承知の通り大日本軌道會社は小田原より熱海へ通する輕便鐵道である。

往昔の箱根八里棧道で、雲助様が幅を利かせた土地だ。夫れかあらぬか。此地方の人情風俗は善からぬ點が多く、沿道の民は會社に野心を抱いてゐる様子で、五人組、七人組、さては顔役がよく難題を持ちかけてくる。從來會社の採りし方針は警察萬能主義で、一寸した事も巡查の出張を煩はして高壓力を以て威壓せんとした爲め、一方でもオメ／＼負けてゐず、こゝに喧嘩の花が咲いたのであつた。

香取は此の消息を知るが故に、就任匆匆顔役連を招待して、酒盃の間にうまく話をとりきめた。最後に、

「僕は社會の事にはカラ意氣地ない書生上りである。是から諸君と交際が出来るかどうかと心懸りに堪へぬ。始め噂に聞けば諸君は頗る猛烈な民族である。ワカラズヤであると言ふ話であつたから、内内其の覺悟であたが、實地に會つて見ると、まんざら左様でもないらしい。だからお互に一つ面白くやらうではないか。僕に悪い點があるならば、ブウ／＼陰口を利かすに、面と向つて直言して下され。僕が眞實



悪ければ降参する。諸君が悪いのならば此香取はあく迄も争ふ。僕も喧嘩が好きだ。男だ。まかり間違つたら、決闘でも何でもやり兼ねない男だ!!」

顔役連は大いにその勇敢と才氣とを買つて呉れて、折合が急によくなつた。

いよ／＼締めたと勇躍一番、今度は内部に改革を施して、冗員を淘汰し、不正職員を蹴きり、極端な革命を断行した『早く走らんとする者は躓く』彼はやう／＼一部に嫌遠主義（敬遠主義にあらず）を以て向へらるゝに至つた。折も折、時も時、彼は六ヶ月ばかり徴兵に召し出される事となり、期満ちて歸り来れば、反対派の中傷の爲めに退けられて免職となつた。

あ、誰をか憎み、誰をか怨まん。水清ければ魚は住まず、香取はオベツカ萬能、情實全能の社員たるべく、あまりに卒直過ぎたのだ。彼は沿道の壯士の吾事の様

に怒るをなだめ、潔く職を抛ち、恩人雨宮氏の許に赴いた。雨敬も今更どうする事も出来ぬ、彼が獨立自營せんとするを聞いて、大いに訓言を與へ、金五圓を出して

「僅少な金ぢやが、これでも無ければ首をつる馬鹿もある。死ぬ程困らねば使ふな

さあ行つて働け、獨立奮闘は男兒の生命ぢや」

といつた。此一句を心魂に銘じて彼は白雲の、行く手定めぬ如き浪人となつた。

奇才溢るゝ頭を叩いて案出したのは花形富士安全封筒といふ便利な状態袋である。

近々に新案登録をすまして大いに賣出すとやら、自分で車を引つぱつて奮闘すると腕を叩いて氣張つてゐる。面白い男ぢや。シツカリやれ、

ハイカラ令嬢を罵倒して革命軍に入る

▲婿なんぞ眞ツ平

一寸した金持から養子にでも望まれ、ば、相手の嬢様がオデコでも、ピツコでも委細かまはず、尾を振つて行く腰ぬけ共の多い世に、さりとは痛快な！こゝに勿體なくも華族との縁組を茶々目茶に、踏んでのけた青年が御座る。



吉松孝、號は無垢、幼にして母に別れ、十五にして父を失ひ、伯父の家に寄食して神田中學を優等で卒業した。五尺七寸の美丈夫。

伯父は醫を業としたが、本業はカラ駄目で、幫長的の庸醫ぢや。舊藩主某子爵家に出入りして居つた。賢明なる子爵はいつか吉松の秀才なる事を傳へ聞き、令嬢の婚にせんと伯父なる醫者に説いた小膽なる彼は夢かと驚き喜んで、下駄を片々にはいて犬を蹴飛ばし、車屋を叱咤して、轉ぶが如く自分の部屋に闖入した

『やい孝!! 貴様は仕合せな奴だぞ!』

と、これを冒頭に縷々數千言、爵位と財産の有難味と、令嬢の美を述べ立てた。孝は迷惑さうな顔をして、机の隅で蠅が手躍りをしてゐるのを頻りに眺めてゐたが冷然として只一言

『婚はいやです』

伯父は丸々しい面を更にふくらした。シカシ、縁談だけはたとへ親兄弟と云へど

も干渉すべきものでないから、前と反對にしほれ切つて、子爵邸に到つて詫びた子爵はその言を壯なりとして益々望んでやまない。

『ぢや嫁に呉れてもわゝわ』

とまで仰せられた。話は何日に見合ひとまで進行したのである。

▲それは平常着ですか

伯父はホットーと息。やれ安心。いくら孝が堅造でも、あの氣高い嬢様の顔を見せたらば二ツ返事であらう。甥の出世は吾が出世——あゝ有難い——と扇で額をビシャン〜。

いよく見合ひのその日とは相なつた。櫻は七分通り梢を辭したが、これまた異なる一と風、庭廣くとりまはしたる子爵邸は風薫り、蝶の夢長閑である。

すばらしく立流な油繪をかけた應接室腰かければ下半身埋まる様に感せらるゝ安樂椅子。こゝに例の三人が相對した。



飛白の着物に小倉の袴をはいた孝はキツバリと言ふ

「時間が大切ですから、無駄話は抜きにして、早く見合ひをさして下さい」

人の事か。吾が事か。大事な時に大變を言ふ奴と、伯父は火の様に紅くなつた子爵は随分骨の硬い男よと、紫迷ふシガアの煙の間から眼を細め、笑を含んで眺めてゐる。

處へ、来た！来た！今日を晴れと飾つた令嬢が来た。小間使ひや何かゴデ〜三四人も後に随へてゐる。

「吉松君、これが俺の娘ぢや」

「ハアさうですか。御令嬢の着物は他所行きですか。平常着ですか」

奇問一番、一座呆然。子爵の目は鋭く輝いた。令嬢の頬にはさつと紅の色が走つた。伯父は蒼くなつた。五尺七寸の美丈夫、白哲のおもてに笑をたへて獨り平然。然し伯父のお出入りは即日差止め、縁談は木ツ葉微塵、伯父は氣違ひの様になつ

て怒鳴りつけた。彼はニツコリ。

「共に語るに足らんです。丈夫の志はおわかりにならんでせう！」

二尺三寸、長船の銘刀を呑んで家出した。行手は白雲漢々。

▲噫、洞庭の波騒ぐ夕

男子四方の志、學問もよいが、學問がなければ世が渡れぬとは誰が言つたか。學士の肩書まで取つて腰辨になるのが何が名譽か。眞男子は須らく眉あげて、海外の一角を占領すべしだ。

彼は北滿州より南滿州。つひには南清に漂浪して、革命黨の主領孫逸仙と相識つた。洞庭湖の波騒ぐ夕、志士は月下に密議を凝した。されど時に利あらず、孫主領囚はれの身となつて、他は四散八落運拙きは刑場の露と消れた。

彼は捕縛された。護送の途中一名の獨逸人、三名の日本人と遁れ、夜をこめて山に入り、手銃と首枷を破壊して四名と別れて二年間清國內地を縦横に踏破した。



清國政府つびに彼の首を一千兩の價金を以て買はんと命するに至る。彼は例の通り笑つた。冷やかに笑つた首の危ない中を二ヶ年間平氣で流浪した何たる大膽ぞ。

福門に革命黨の一同志と會して、俱に長崎に歸つて、此時はもう多數の黨員が亡命してゐたので、政府も少なからず警戒した。そこで忽ち滿州に去らうとしたが日露の風雲まさに動かんとして、露國の備へ頗る儼、即ち自由の天地たる南洋に去つた。此頃はどこで何をやつちよるか小人跋扈して眞男子艱難に遭ふ。げに儘ならぬ世ではあるわい。

### 雄辯書生黒象將軍

▲寒中でも上衣一枚だ！

福井縣縣立小濱中學は或は都人士に認められて居らんかも知れぬ。所謂望遠鏡

の先に、顯微鏡をくつゝけて、一生懸命にさがしても見當はぬ學校ぢや。シカシ、維新の風雲を捲きおこした奇傑、梅田雲嶺を産した土地だけに、その感化は今に及んでゐる。

多きを云はぬ。先頃六號潜水艇の沈降に際し、司令塔の微光に照らして、死生を度外視して、壯烈鬼神を哭かしまる大遺書を草したる、佐久間大尉は、この學校で、四年級の二期の十月迄孜孜として學んだのだ。

知らずや國士たる正大の氣は、全校幾百の健兒の脈絡に溢れて居る！ 而して名物男は五年級の高井君を筆頭とする！

高井君は運動は角力の外やらぬ。容貌は鐵血宰相ビスマルクに髣髴し、顔色は印度人跣足。ブク／＼肥れた處は大山元師の様なり。即ち彼に奉つたるニツクネー

ムは

「黒象」



然りこれは好命題である。よく食ひ、よく太り、眼は小さく、尻は大きく——耳はあたり前だが——悠揚として迫らざる中に、自ら他を壓する氣概がある形は象がアニマル界に於ける如しだ。いつもズボンのポケットに兩手を突き込み、稍稍反り身になつて、チロ／＼人の目つきを見ながら歩いて居る曰く「人物の賢愚良否は眼附でわかるぞ」と。

彼は無禪主義で、同時に上衣一枚主義だ。灰色の雲が、萬事巴と渦巻いて、颯々、雪チラホラの冬は、柔弱は火燧に啣りついてもたまらぬのに、彼は全身に男兒の血汐湧くが故に、寒いだけで、病氣にならぬ。

▲なりそこねたる理學博士

黒 象クンは雄辯で御座る。

一度び口を開けば、縦横の辯四隣を驚かすものがある。大抵の奴はアテられて豆鐵砲を食つた鳩の様に、眼の玉をバチクリさして謹聽仕るのだ。萬一少しでも横

槍を入れれば、駁論更に數千言、是には誰でも閉口頓首也。

黒 象クンは又、幾何と物理が得意で御座る。

何でも三年級の始の事、幾何を學び始めてから三四週間に、生意氣にも、一の定理を發見したとかで、奴さんファン反りかへつて威張るらく

「こいつを數學研究會へ提出したら、乃公は一躍博士になる。うれしいな！ さうしたら奢るよー」

鼻高き事正にニメートル半。

之を數學の先生に示すと、首をひねつて考込むだ。さあ縮めた！いよく理學博士だと思つてゐると。アラッスー

「これは定理ではない」と宣告されて、折角伸びた鼻も、へたく／＼崩れて仕舞ひける。

物理の時間に公式を否難する。倫理では、例の雄辯を振つて反駁を試みる。いつ



かも、四十七士論で先生を煙に捲いた。

彼の頭は非常にクリヤーだから、理否曲直は一目してわかる。級に葛藤の生じたときは、よく判断し、よく仲裁する深く考へ、強く行ふ——彼は意氣の鞏固なる好青年だ。

さり乍る黒 象クンの不得意は英語で御座る。

此の時間には、小さな眼を心配さうに光らせて、俯いてゐる。たま／＼順で當らうものなら大恐縮、横聲を無やみに張り上げて、イット、イズとやらかす。

▲桂太郎クンは狗盗の雄のみ

或る友、彼に問ふ

「日本に名士幾人ありや」

彼答ふ

「眞の名士一人もなし。早稻田伯はやゝ話せる！」

「桂總理大臣は？」

「桂クンなんか駄目さ！」

彼は隈伯の外に唯一人、押川春浪君を尊敬して居る。つねにその文章を愛讀し

「オイ見ろ。乃公は春浪君が大好きだ。無責任なる先輩が現代學生の悪評をすれば、

極力之を辯駁して、學生の保護をなすではないか。今度上京したら會ふて、聊か

胸中の不平を洩さう」

と云つてゐる。

彼は理想的政治家にならうと云ふ願を持つ。今春、代議士杉田定一君一行が來濱

しての報告演説の中に「交換問題を以て某政黨の乞を容れ」云々とあつたので、

彼は頻りに怒つてゐた。公然と交換問題云々をサラケ出すのは、政治の腐廢を示す

のである。乃公が政治家になつたらこんな生ぬるい事はせぬぞと、腕をたゝいて居

つた。愉快な奴ぢや。一高より法科大學に入り、將來は代議士となり、ついに總理



大臣となつて、日本の天下を取つてかへさうとの意氣込み。それもよかる。勝つも負けるも問ふ所にあらず。男兒らしくやるべし。

### 狂熱書生松野兵衛

攝津池田師範の松野兵衛は喧嘩兵衛と籍名のある位、ケンカの好きな腕白坊主ぢや。

僕はかつて彼に誘はるゝ儘、隣村のいろは座なる劇場へ芝居を見に行つた。出しものは、岩見重太郎。

何でも重太郎が、七人武藏の一人、赤星主膳と喧嘩をおつ始めて、強力の重太郎が勝ちさうになつた。俠氣のある喧嘩クン、ムラ／＼と逆せ上つた。飛鳥の如く舞臺に躍り上るや否や。

「今度は乃公が相手ぢや」

と、重太郎の横面ピツシヤリ!! 大力の筈の重太郎、鬘ヒン曲り、ドシンと尻餅

ついた。

「狼籍もの」と赤星が大喝して打ちくるを、引ッ外づして、

「エイ面倒な! 喧嘩兩成敗だ!」

鐵腕一揮、今度は赤星の鬘は消し飛んで、蛙の様にヘタバツた。

さあ見物は總立ちだ。巡查や、座方や花粧中のお姫様の役者などガヤ／＼と集り來つて、彼を取つておさへた。僕は馬鹿らしくもあり、腹も立てど我慢して、その狂熱的學生なる事を語り、大いに謝罪してやつた。彼は此時吾にかへつて、

「イヤこれは大變な粗忽をした!」

と頭を掻く無邪氣さ! 見物一同寧ろ可笑しくなつて、棘もくづるゝ高笑ひ。

聞けばその習日、撲られた二人の役者から進物を持たして彼の處へ禮に來たさうである。曰く



「未熟の藝もお客様に真剣の様に見へたと思ひますれば、こんなうれしい事は御座  
いません！」と。

彼は拳固を甜めく笑つてゐた。

「今年や南瓜の當り年、撲つて禮が貰へるなら、是からもやるぞ。面白いなく」

### 月下に不名物男を制裁するの記

#### ▲三傑とハイカラ野郎

名物男集に一つ位の不名物男を制裁した記事があつてもよいではないか。實に痛  
快な事をやつたんだ。

何を隠さう此三人は來年徴兵に召出されやうと云ふ年で中學の三年生である。同  
級に鐵拳サエよりも固き犖猛漢戸山香龍と、十七歳で二十ポンドの鐵啞鈴を樂に  
振りまはす怪力家秋田虎嘯と云ふ奴があつた。三人ともに江州〇〇中學の端艇部の

選手で、毎年琵琶湖上の武徳會の水 上大會に勇名を轟かした連中だ。諸君御承知  
の通り、中學の二年級から三年級の時代は、一生百二十五年中で最も無邪氣にして、  
活潑な一時期である。飛びまはりハネまはるは若い中の事とて、腕白遊びはするが、  
憚り乍らそこは冒險世界でも愛讀せやうと云ふ吾等の事、學生として耻かしさ、ある  
べからざる不行儀不品行は露ほごも犯さぬ。

處が去る二學期の末、京都の某校から四年級へ轉校して來た花山と云ふ一寸色の  
なま白い、骨細の瘦せハイカラがある。田舎に珍らしい薄桃色のシャツを着、胸に  
オリブのリボンを結び、氣取り散らしてテニスをやるスタイルが、橙骨黨の眼觸は  
りになつてならぬ。平生からテニス部とはにらみくらであつたが、特に花山に對し  
ては、餘計に眼が光る。花山も負けぬ氣になつて、何、一級下の奴共と高くとまる。  
こちらで女郎の半腐れと仇名をつけてやれば、あちらでは野獸漢と呼びくさる。形  
勢益々不穩と相なつて、機あらば橙骨黨の鐵拳を彼の頭に加へんと天に誓つて虎視



既々たりだ。

シカシわが校の美風として殆んど軍隊的に上級下級の區別がされてゐて、たゞ此儘では百年待つても手出しが出来さうもない。とは云へ月日は持つべきもの。ふとした事から珍聞が耳に入つた。

▲袂から香水くさい手紙

それは花山め、近頃某煙草屋の看板娘と變な噂がたつて、折々寄宿の門限を破つて、彼の女の手をとつて散歩するとの事。由來規律の嚴を以て鳴るわが寄宿の舍則を紊す渡り者！天誅を加へて、一と泡を吹かして呉れんど、早速探偵にとりかゝた。

約一週間あまり三人六つの眼は彼の行動に注いだが夫れらしい香はするが確證がない。何事も證據裁判の世の中、これでは困る。とうとう短氣の戸山は、辛棒しかねて、ある日の骨操に、足が頭痛するとか何とか口實をつけて休み、花山の室へも

ぐり込んだ。

先づ引出をさがす。本箱を調べる。詩集を振つて見る。つひには柳行李の底までハタイだが、こいつめく、餘程巧みにかくしてゐると見へ女文字の紙片一つ無いわい。寶の山に入り乍ら手を空うして歸る心地、今度は念のために着物の袖を一つく探つて行くと、あつた！あつた！！行李の一番下の裕の袂から、香水か何かの香いのする薄緑色の封筒が出た。男文字の立派な階書だが、こいつ怪しいと引出して見ると、果して女文字のなまめかしい一通。御なつかしいとか、何とか蚊ごか。イヤモウ蟲づの走る様な文句を澤山ならべ、場所だけに近江八景の地名をよみ込み粟津歸れば氣は矢走なごゝある。来る十七日は幸ひ土曜にて、月も清く候へば、あなた様には先日の如く御歸宅の届をお出しなされ、私方へ御こし被下度、ともに手をとりにて城山あたりへーとあつた。

十七日と云へば發見した日から二日後だ、手紙を沒收しやうかとも思つたが、奴



さん時々出して、キツスでもするんたらうからと、矢張もとの通にして、飛び出して来た。

この話を聞いて秋田は火の様に怒り、學校長に申告するといふ。戸山は四年級生に制裁さうと出張する、色々相談の結果僕が二人散歩の現場をつかまへてプチのめさうぢやないかと方針がかはり成程々々それよかるそその場は別れては舞ひけり。

▲何だ金だど？馬鹿申すな

さていよいよ當日となる、日本晴の好天氣、朝から夫れとなく花山の顔を見ると、神經衰弱の戎様みた様に痩せ乍らニコニコして居る。果して夕方になると家事の都合により歸省致度候と、一札舎監室へほうり込み、飯もそこ、倒の桃色のシャツに白靴はいて飛び出した。ソレツと云ふので三人は一泊旅行の届を出し、大義の前の小事と、操體器具室へ忍び込み荒縄と、手頃の棍棒など選つてゐると、陰曆十七日の大月盆の如きが團々と昇つた。

三人で煙草屋の前を素知らぬ顔で通つて見ると、いつも店にゐる筈の娘殿御缺席で、その代りに皺くちや婆さんが座つて御座る。何となく一たい様子が花山先生おこもりと云はん許り也。めい／＼舌を出し乍ら、招魂社の境内の大燈籠に身をかくし、寒いのに御苦勞千萬、二時間あまり松の樹かげに造り人形の如くなつてゐた。人足やう／＼とだね行く頃、ドーヤラ花山の一對はやつてきた様だ、彼の所謂三野獸が潜むとも知らず、睦まじげに語りつゝ寄り添ふて来る。少しやり過して時分はよしと三人はワツと一時に躍り出で、兩人に飛びかゝる。

是れはと驚く花山、女はギャツと逃げやうとするを、柔道達者の秋田が、己れ小女郎と引つとらへる残る二人は花山の兩腕ムツとらへた。

人殺しイと女は叫ぶ。貴様下級生のくせに生意なと花山は眼をムク、そんな眼をむいたとてこわく御座らぬ。黙れ色男と！氣早の戸山が横面ピツシヤリ。秋田は早や女に猿轡を飲めてゐる。痛快々々



サアこれから二匹の料理——イヤ 制裁の始まり！と、シャレのめしつゝ用意の縄で悠々二人を縛しかける。こうなると花山は腰ぬけ男、もう泣聲になつて、僕は實際わるかつた、それだけの金子でも出来るだけの事はするから許し給へど、自分の下劣心より割り出して云ふ。馬鹿め、天下の豪傑がユスリをすると思ふか！と棍棒で額を一ツゴツン！ 見てゐる二分もすると瘤が出るぞ戸山がわめく。残る一人はその尻ツぶり腰を蹴飛ばしてやつた。

▲鐵拳制裁は神聖也

次なる藝當は小女郎と花山を一しよにくつて松の樹にブラさげ様といふのだからチト面倒だ。女はなぐらぬが、花山の方はビシと交る／＼ふちのめしてやつた。わんわん泣いてゐたが、可愛さうに聲が囁れてきた。豫定を變更して花山だけ松の木に吊り上げてやつた。

月は隈なく照つてゐる。花山のベソかく面は實に天下の見物ぢや。先生オタノシ

ミに來たのがオクルシミに相成つたのだ。これも教諭と父兄と學友の眼を掠めたスコ罰で御座る。

三十分あまりして二匹の縄を解き、後來を戒めてゆるしてやつた。女は差支へなく歩いたが、花山は腰がぬけた様になり、ヒヨロ／＼してゐる。僕らはうつちやつて歸つたからそのあとは知らぬ。道具はもとの庫へかへしておいて、その夜は久しぶりで愉快なる夢を結んだ。

花山は二日たつても四日たつても十日十五日とたつても歸合せぬ。二十日に彼の家の下男が來て、病氣で休校するとか何とか云つて荷物をまとめて歸つたがその後杳として消息を聞かぬ。煙草屋の女はしばらく何食はぬ顔して店に出てゐたが、一件學生間の評判になり、物好きな連中が悪口云つて通るので、これも店をたゝんでどこへやら……。

月下の制裁はつひに校長の耳にも入つたさうだが相手が花山だからお咎めはなか



つたけ。

其後三人の書齋の柱にはかう云ふ文句が書いて張つてある。

「青年はよろしく快活潔白なるべし。ハイカラ野郎はなぐるべし。駄馬に鞭たすんば進まず。ハイカラ野郎に鐵拳を食はさずんば改めず。あゝ鐵拳制裁なる哉」

### 藏原赤チヨツキ君の甥の支那右衛門

#### ▲三尺のダンビラを引ん抜いた

東京の北十里、芋を産するを以て名高い川越町には、中學校、染織學校、女學校等があるが、學生の氣風が一般に温順だ。中學に隣つて小學校あり、二年前に卒業した生徒に、亂暴な名物男があつた。

名は佐藤支那右衛門之丞維望——嘘ぢやない。勝手にもさう書いてあるわい。奇妙な名だが、人間は、走をかけた奇人だ、實父は維昇と呼び。前川越中學校教諭だ。

現今下院の名物男、赤チヨツキ藏原維廓君はその兄だ。即ち支那右衛門之丞維望君の伯父なんだ。

一體彼の一族は代々頗る脱線な男が出るさうな。彼は伯父さんソツクリの髯男だ。親父に似たものか、成績は普通品行點は零と——云つて決して遊んだりなぞせぬ。イタヅラをするからぢや。

その昔、祖父さんでも着たものか、袴を包みの中へ入れ、大小を落し差しにして、高足駄はいて、のそり／＼通學する、校内では巡査に叱られる憂がないから、直ちに袴着用に及んで、馳けあるいて弱い者いぢめをする奴を片つ端から擲り飛ばしてゐる。下級生は大喜びだ。同級生は敬遠主義だ。

處が一日、一人の上級生が、あらう事があるまい事か、ローズの香ひのする女の手紙を取り落した。平生から、こいつ怪しいと睨むでゐた彼は、飛鳥の如く飛び込んで、拾ひ上げて見ると、イヤハヤ、反土の出さうな手紙である。かの軟骨漢氣が



氣でなく。

「オイ佐藤君返してお呉れよう。先生が来るからよう」

「待て、も少しでお仕舞ひだ」

「そんな事を云はずによう」

ひつこく追つた。支那右衛門之頭維望クン疔癩玉が爆烈した。

「ウルサイツ！」

一喝と同時に、腰なる秋水スラリと抜いた。玉ちる剣光虹の如く半圓を描く折も折、そこへ首を出したのは黒鯛の異名ある一先生。

「ワツ！」

もう少しで腰を抜かす處であつたが、相手が佐藤と見るより忽ち赤鯛と變じて、「危険いッ！馬鹿野郎。手に持つたは何だ」と、ガタガタ震へながら怒る。手紙は取り上げられた。刀は卒業迄預りとなつた。佐藤の唇には冷笑の色があつた。軟骨

漢は土の様な顔色であつた。

翌日、軟骨漢は停學の處分をうけた。

#### ▲石合戦の七日間

小學校の裏に竹藪がある。いゝ竹藪だ。それを例の刀で伐り拂つたのは支那クン！彼が晝めしを食ひに來ると田を控へて向ひの土手に、中學生が日向ぼっこをしてゐる。

「ヤーイ佐藤の氣違ひ野郎！」一人がドナる。

「何だヘッポコ中學生！」と彼が石を投げる。

石合戦が始まる。毎日續いて七日目に、佐藤の腕に一ツ命中した。さあ口惜しくつてたまらない。翌日になると祖先傳來の短刀を呑んでソツと、土手に登れば、七八人目を浴びて馬鹿話しをしてゐる。

「こら、昨日石を投た奴喧嘩せよ」



と、巨人ゴライアスに向ふダビデの様に眉を揚げて突つ立つた。右の手は碎けるばかり短刀の柄を握つてゐる。

中學生驚いた。バラ／＼と木の葉の如く土手をころげおりて、それでも逃げ乍ら、『佐藤のチビ助やい！』

もう堪忍せぬと支那クン、小石を拾ふて、スポ／＼投げつける。一ツや二ツは命中したに違ひない。

今は彼、角帽を着て（中學生でもこうは角帽）大道狭しと濶歩してゐる

### 饒別の鐵槌をかつて西藏に去りし

### 福井第一の名物男

▲ヤア死んぢやつた

水野は確かに福井中學生一品の豪快書生だ。

彼の父は舊藩士中隨一の變テコ人であつたが、十年以前に自殺して、彼は野中の一木杉の様な身の上となつた。然し乍ら奴さん平氣の平三生れついで野蠻具體的に云へば、喧嘩好き、冒險好き、そして數理的の智識に富むた男で、數學の先生をへこます事も少なからぬ男であつた。彼は輕々しく笑わぬ、もしニヤリと笑ひを漏すと、必ず猛烈な、思ひ切つた事をやる。

夜分彼の下宿へ遊びに行くと『ハイレー！』と怒鳴りつける。眞暗な六疊の書齋の真中にランプもつけず熊の敷皮の上に座つて、琵琶などをうなつて御座る。その熊の皮は、彼が三年級の冬休みに、劍ヶ嶽の麓で狩り立てたのだ。その時爪でガシリとやれたのが、左の頬三の月形の疵だと云ふ話だが、彼はそれについて何とも云はんから誰も知らん。

柔道は一級であつたが、たしかに初段以上の腕があつた。東京の本部へ行けば初



段になれるせと云へば、

「馬鹿。初段が何だ」テンデ相手にしない。

昨年三學期の大會に、中學と師範の紅白勝負があつた時、味方は連戦連敗の姿であつたが、最後に彼と敵の大將とが、立上つた。彼はニヤリ笑つた。

「ソレツ！」

と一同は總立ちになる。雌雄を争ふ一二分、彼は又もやニヤリと笑つたと思つたら、急に體を締め、右手を敵の股間にさし入れたと思つたら、豚の様な大敵を肩車にかけて來賓席めがけて叩きつけた。テーブル碎け、茶碗飛び、敵の大將は見るしくも氣絶して仕舞ふた。満場大騒ぎ、知事も會長も椅子から飛び立つた。彼は驚いて馳けつける師範を顧みて、冷笑一番！

「やア死じぢやつた！」

まるで芋蟲でも潰した様な口ぶり。

▲切腹しろ腰拔め

もう三月で卒業といふ五年の二學期の末、新來の外國語の先生と口論をはじめた、彼の性質を知らぬ事として、真赤になつて怒鳴りつけた。シカシ中等教員あるまじき道樂先生なる事を知る彼は

「キサマ廊通ひをする男にしちやア、翠丸が小さいな」

といつた。その結果が、職員會議にのぼつた。どの先生もみな放校説に賛成であつたが數學の先生のみは頑として

「彼は無敵砲な男だが、又擡んでた點がある」と辯護する。校長も

「水野は東北に珍らしい男ぢや」

お蔭で首はつながつた。

多血質の彼は聞いてだまつて居らず、短刀を持って教員室へ談判に乗込んだ。折もよし、數學の先生が居あはして、彼を抱きとめて、



「水野、君は無謀ぢや。その勇氣を大事業に注げ。な。な。わかつたか。君は千金の兒ぢや。必ず成功する青年ぢや」

となだめた。彼はこの知己たる先生の一語に感じて、ハラ／＼と涙をおとした。

眞蒼になつてゐる英語の教師の前に短刀を投げつけて、

「腰抜け、良心に耻ぢるなら切腹しろー」

彼は四方の志ある男だ。一枚の卒業證書に戀々たる男でない。即日退校して、

僕の家へ遊びにきたが、

「日本は癪にさわるからチベットへ行くー」

と如何に諫めても聞き入れぬ。僕は彼の前途の祝福を天に祈り、錢別として、秘藏の鐵槌を贈つた。

「こりや奇抜ぢやな。これで天下の奸物の頭をたゞき割つてやるか」  
と手を拍つて笑つた。そしてその夜は快談して、共に眠つた。

翌日彼は飄然と教賀を云つて天涯の客となつた。

「水野はホントに西藏へ行つたんだー」

と僕らはいつも話あつてゐる

### 一年間村はづれの社で柔道の練習

▲柔道は呼吸もの也。

勿頭の友に江原といつて昨年佐賀の中學を卒業した奮闘的快男子がある。もとは五尺に足らぬ小男で、おまけに痩せてゐた。勿論腕力も弱かつたし、角力も負星が多かつた。こゝで發憤する様になつたのだ。そして三年の時は黒帯で助手の資格であつた。

彼は一年級の頃から柔道は志してゐた。寒稽古なども一日も缺かさないが、心外にも、力負けをしてばかりゐる。同じ位ゐの身長の奴と組めば業もぎくが、上級



の大兵肥満の奴にかゝると駄目だ。一例をあぐれば、腰投げをやわために自分の尻を敵の腹の下へ入れは入れても、力の強い相手はかへつて、帯を握つて彼を仰向けに倒して仕舞ふ。ごうも困ると、こゝで寝食を忘れて考へた

傳へ聞く昔は劍客塚原卜傳、五尺の短軀を以て、到る處に大力の士を負かした。現今の嘉納開祖や、得能七段などは見ても心地よき體格である。シカン半田四段は(又聞きではあるが)自分と同じ様な小男ださうな。元來柔道とは、その名の如く、柔にして剛を制すべきものではあるまいか。もしさうならば、修養一ツで上手の仲間に入る事も絶體的に不可能ではあるまい。

よろしい、決心はさまつた。いざ！と、草木も眠る丑の刻に、稽古着とズボン下だけになり、村はづれの天満宮の社へ急いだ。

▲ついに白狐と間違へらる

上弦の月は西の空へ投げられて、オレンジ色に輝きて、天も地もシーンとして、

野川の水音ばかり身に泌みる。社殿は鬱鬱たる楠の大木庇を掩ふて繁り、後は晝なほくらす竹藪だ。夜嵐が、轟——ツと吹いて來ると、落葉がカラ／＼と地を捲いて走る。竹が擦れ合つて涼々の音を發する。何となく人類絶滅以後の様な氣がして、心細かつたが、馴れるに従つて、淋しみの中に一種云ふべからざる面白味ある事を發見した。

ピタリと拜殿に端座した。水の如き月光庇を滑つて、下半身はその光を浴びる。風の聲、葉すれの音、彼は徐ろに眼を閉ぢて、無念無想の境に入つた。

しばらくあつて、起ち上り、一人で型を練習し、打ちと受けとを會得する迄獨習した。こいつが一應すむと、色々工夫して相手に應用する事を考へた。ものゝ一時間もシタパタやつて歸つて行く。第一夜はかうして過された。

翌日學校で實地に試ると、なか／＼うまく相手かかゝる。彼は幸先よしと喜んだ。かの静止せる水面に物を寫せばよく寫る如く、精神を平靜にして工夫するもの



だから立派に出来るのだ。

サアもう面白くてたまらん。黒雨の降り荒る、夜でも、寒風吹きまく夜でも、屈せず撓まず通つた。この大練習は、驚く勿れ一ヶ年続いたのである。

果せる哉、めきとく進境があらはれた。柔道部の仕合で、紅白勝負で数人を抜き、別に校中の剛の者、西川といふ大男を美事投げ飛ばして大勝利を博した。師範の辻二段が彼に囁目したのは此時からだとつたへられる。以来彼は助手になつた。天満通ひは益々つとめる。腕は益々冴れた。

處がそうする内に近頃天神堂に化物が出るといふ噂がバツと廣まつた。何でも晩の十二時頃になると板間を崩るゝばかりの音をさせる。まさか鼠やテンであるまいといつてゐると、二三の若者が、隣村からの歸りに、こゝをのぞくと、月明りに白狐が躍つてゐた。ワツと逃げ出したが、村へつくと急に氣強くなり近所合壁たゞきおこして、手にく得物をおつとつて來て見ると、その時には彼は己に居らなんだ

ので、騒ぎもおこらずにすむだ。可笑しいのは田吾作共が、カ、ア左衛門に。

「天神様さまには悪い白狐が居るちうけん。宅の子供は遊にやつてはいけんよ」話してゐたさうぢや

### 蠻骨と磊落とを命とする「ヤン」忠君

#### ▲寒いイタツラ

「やん忠」と云へば誰でも知つて居る釜山商業學校切つての腕白だ。酒を好むが色を斥け、洒落と蠻骨とを生命とし、自ら「やん忠軒源吉」なる雅號をつけた。本名荒木忠二郎である。

彼は水泳が大好き。わけて三冬の寒空に海水浴をなすを誇る。此點すでにハイカラの膽を冷すに足るのだ。冬の日の昇る事おそく、また東はほの白くなつたばかりの頃、身を切る如き曉風に武者振ひをしながら飛び出すのは「ヤン忠」で御座る。



スワポリと着たる外套姿を怪しむで、横町の角から、犖犖な白犬がワンと吠えつゝ。シツ／＼と叱るがなかく逃げぬ、果ては一犬虚に吠えて萬狗之に和し、斑やら黒やら、五六匹も彼をおツどり巻いて食ひつかうとする。彼はその邊に落ちてゐた。棒切を真向に振りかざして、今しも飛つく白の横面ハツシと打つた。キャンキャン／＼と尾を巻いてまつしぐらに逃げる。他の犬共のひるむすきに彼は海岸めがけてスタコラ、スタコラ。やるまいぞと犬は後を追ふてくる。

寒潮渦まく南溪の岸上、彼は手ばやく着物を脱いで、平手でボンと胸を打ち、猛然と追ひすがる犬を尻目に見乍ら、やつと一と聲、身を逆まに浪の中。一二反泳ぎ出して願れば、犬は彼の着物を嗅いでゐたが、手もち不沙汰——イヤ口持不沙汰に引き上げる處「やん忠一君大得意だ。

この時この近くに縋つてゐる和船があつたが、水面に常ならぬ響がしたので、曉の夢を破られ、ふいとトマの間から覗くと、一人の青年が苦しうに眉をひそめつ

泳いで居る、テツキリ身投げと早呑込みして、飛びおきて裸になりかけてゐる。

もとより人一倍賢い「やん忠」だ。ちやんと船頭の心を見てとつた。少し殺生だが、一と芝居してやれと、今にも溺れさうな風をして見せた。船頭は一刻の猶豫もせず、

ザブリと音させて水中の人となり、抜き手を切つて近づいてくる。つかまつては大變と、もぐり込めばア、仕舞つた!! と船頭眼を皿の様にして見まはせば、二三

問先きの方に、両手で何ものかつかむ様にしながら浮き出たそれ! とその方へ泳いで行くと、又た頭は水中に没して、白い波が渦まいてゐるばかり。浮いては沈み

沈んでは浮きつひに全く見なくなつた。船頭はガツカリ、急に寒くなつた。身體が痛くなつた。悪くすると誰からか救つてもらはなければならぬ位だ。やつとの事

で、自分の船に泳ぎついたが、あまりの馬鹿／＼しさに、鼻を呼ぶわけにも行かす。一人こそ／＼匍ひ上つて、唇を土色にして、禪の水をしぼつてゐると。岸の方で阿

呵大笑する者あり。見れば正しく先刻の青年——やん忠君だ。



あんまりの事に船頭は口あんぐり。  
『もう俺らハア一生人を助けねぞ』

▲一錢五厘のボチ

彼は小銭があると、貯金しておく。無用の費用を省き得たときも矢張貯金する。それには『やん忠』一流の細工が施してあるとは誰も知らない。

彼の一友が家事の都合で遠く去る事となつた。その折五六人で送別會を開いたが、彼曰く

『僕は冗費を省いて溜めた金がある。こんな時に使ふべきだとおもふ。今夜の費用はみな僕が負擔するよ』

やがて、會はて、勘定の一段になつた。彼は下女を呼んで曰くさあこれを受とれつ！とばかり、黒い箱から、何か黒い碁石の様なものをザラ／＼と出した。それは皆な銀貨、ニッケル、銅貨などで、御叮嚀にも墨で眞黒に塗つてあつた。

一座茫然。下女アングリ。

『オイ早くしないか。憚り乍ら偽なぞ一錢だつてないぞ！』

と大喝する。下女はやつと集めて持つておいた。一同その墨塗りのわけを問へば、『なあ君、おれが眞ッ黒になつて貯めた金だらう。黒いのは當り前ぢや。乃公が大さくなつてから溜める金も、みな墨で塗りつぶすわい』

『紙幣はどうする？』

『フム、紙幣か——困るな紙幣は——いいさ、金貨で溜めるから』

この奇答には一同大笑ひ。

話かはつて下女は帳場へ金を持ち行つて、一と騒ぎ。それが二十錢やら五錢やら一寸わからぬので、一先づ水で洗つて數へてゐる。その邊にゐる奴の指の先は皆な墨だらけ！

やがて受取に添へて恭しく齋らした餘錢は大枚一錢五厘也。



彼はそれを紙にひねつて投げ出して、澄まして云つた。

『お前達三人でわけるがよい』と。

一人前五厘のポチには奴さん遠ギヤフン！

▲奇想天外より蒲團落』

彼の書齋は階子段を登つてすぐの八疊であつた。彼は一日、退屈のあまり、茶目的悪戯を旋した。

それは襖を開けると、猿蟹合戦の引うすよろしく、上から尺八が落ちて、額に瘤をこしらへるといふのだ。その犠牲になる奴は全くたまつたものでない。来る客もくゞごかへ瘤を頂戴し、痛み入つて退却した。仕舞にはこの手にかゝる馬鹿者は一人もなくなつた。

彼は百尺竿頭一步を進めて一苦肉の策を案出し、天井にかなり大きい蒲團をつらし、その綱を彼の机の足にくゞりつけそれを解けばいつでも上から落ちる様にして

試むるに、大抵はこの計略にかゝる頭へ蒲團をかぶつてモガクを上からのしかつて、蒲團蒸しなごにして喜んでゐる。無邪氣な男だ！

彼今、出で、東都にある由、相も變らず洒落で蠻骨な事で御座らう。

悪戯俱樂部員活動珍話

『オヤツ！ これは大變だ!!』

今しも福島監獄署の門へ踏み込もうとした巡查は三角の眼を丸くした。時は初夏のある朝、太陽はつい先程昇つたばかりだ目ある者は見よ、石の門には

『あんま、按摩、針もみ療治、里の市』

と大書した看板が懸つてゐるではないか。門番を呼ぶやら何やら大騒ぎとなつた。この珍事と殆んど同時に、市外のある按摩の家の前を通る人はみな目をそば立てた。



「何んだ「福島監獄署」だど！ 人をつけ！ この家はアンマ屋ぢやねか」

「どうした事だ」  
噂に翼が生ねて四方へ飛むだ。佩剣ガチャつかせて虎髯もちやくの巡査がやつてきた。

「コリヤ、お前の家の看板はどうしたのか」

「……………」按摩はまだ寝てゐるので、娼が應對してゐる。

「先日も監獄の門標を外して深の中へ捨てた者があつたらうが、今日の事は一体何故あんな事をやつたのぢや。アーン」

オカミサンには此意味がよくわからぬ色々滑稽な押問答があつた末、ごこかの小供が悪戯に、監獄のと、按摩のと看板をかけたあつた。とうとう下手人は知れないで仕舞つた。兎の様に耳の長い新聞記者は「警察の門標一里飛ぶ」と題して書立て、三面を賑はした。一体誰がしたのだらうと、皆な疑ひの目を見はつた

が、下手人は知れない仕舞だ。笑んぞ知らんや、これ福島中學生徒、安部信の率ゝる「悪戯倶楽部」の連中がやつた事なんだ。

附記。此倶楽部員は不良學生のやる様な愚劣な真似は決してせぬ。奇抜な無邪氣な真面目に怒られない。イタツラをする一体が此學校の生徒、どれもく腕白で、茶目助であるが、彼の一團はその尤たるものだつた。

深夜コツソリ梨泥棒に行き、樹の上で食つてゐると、下から持主が石を投げらる。彼は葉かげに身をひそめ、手あたり次第梨をチギつて應戦し、これを撃退した逸話もある。また或夜一同大根畑から大根をヒン抜いて、評判の悪い女學校の塀の上の忍び返しへ突きさし、大根のイルミネーションをして快哉を叫んだり。同窓のテニス連の軟弱を憤つて、月暗き夜、テニスコートを掘りかへして、例の大根その他の野菜を植ゑ、急造畑とした事もあつた。團員は成績中以上のものばかり、ア、愉快々々



困難を困難とせぬ豪快兒

魁偉なる容貌、長大なる軀幹、廣き額、鋭き眼、眞一文字にキと結んだる大いな  
る口、——金森武雄君は今、日本には居らぬ。彼は書生らしき書生であつた！

彼は十一の時、地主のお坊ちゃんを撲り倒して尾張のある寺の小僧にやられて仕舞つた。刺りたての青光りのする頭を寒風に晒らして、ものみな凍る曉天に拭掃除をさすれ、夜は修業して歩かねばならず、十七までは艱難苦行をした。おかげで困難を困難とせざる男一匹は出来上つたのだ。

中學に入ると、三里の道を跣足で往復して通學した。彼の近隣みな嘖じて云ふ。「武さんの勉強はエライもんぢや。俺が一時頃に小便に起ても、ランブは晝の様に明く、毛唐の寝言が聞かぬさ。」

彼は苦學し乍ら十番を下らなかつた。運動もなかくやつて、競技にはつねに一

等賞を取つた。机だの靴だの重いものが澤山あるもので持つて歸る間に、美事肩をすりむいた。こりやウツカリ一等にもなれんわいなごと笑つた。

中學卒業後東都に赴き、神田の某大學に籍を置いて、夜は俵を曳いて學費をとつた。フートレースの足なみをあらはしてポカ〜痛快に走るので、女小供など乗らうものなら眼をまはしさうだ。しかも江戸ッ子は大喜んで、威勢のいゝ奴だと、法外の賃を呉れた事もある。夜なしと云つて夜だけ稼ぐ車屋で、毎晩一圓以上儲けたのは、彼ばかりであつたといふ事である。

彼は大學卒業後南滿洲へ去つた。キツト近き將來に破天荒の事業をやり出すぢやらう！

不屈巖窟の苦學々生



▲虎臥す野邊の放浪生活

下宿の晩飯が不味いとて、そこそこに仕舞つて飛び出し、ミルクホールで、ワツフルや、コーヒー入ミルクを餌腹平げ、看板娘とつまらぬ會話を交換した揚句、近所の寄席へ飛び込んで、翌日の調へ物をそつちのけに、家鳴の締め殺される様な聲の浪花節を聞いて夜を更かし、歸り途におでんで立食、安酒の立飲、魂抜けてフラリくと千鳥足で往來を歩き乍ら、

「夢が浮世か浮世が夢か……」

など、今の今聞いたおさらへ。ジャージャー小使してゐると巡查にコラツと叱られる——こんな東京の軟弱漢は、中野亭作君の経歴を讀んで魂消るな。彼今や日本三流の一つなる富士川の蒼崖を突破して湧き立つ奔湍を眼下にする巖窟に籠つて

晝夜間斷なく勤學して居るのだ。

彼は如何にしてこの奇抜なる方法を探るに至りしか、先づ溯つて生ひ立ちを説かねばならぬ。

生れは九州の豊後宇佐郡兩川村で、十九年秋母親のオナカを飛出した。なかなか利かぬ氣の剛膽者で、稍や長じては、擊劍で腕を、漢詩學で頭を固めた。小學卒業の後は父母の膝下で百姓をさせられたが、ツムジ曲りの彼は二十一歳の冬斷然家出して遠く走り、よしや一時不孝の罪を犯すとも、他日の成功を齎らさんとした。霜が眞ツ白に板屋根におりて、平和な村はまだ眠つてゐる時、曉風殘月に嘯いて、彼は出奔したのである。

彼は燃ゆるが如き功名心を原動力として、西に東に漂泊した。天は其人に大任を下さんとするや、あらゆる艱難を與へて、其心膽を練らしむるとや。一敗屈せず、再敗顧みず、健闘復た健闘、どこかで學資を獲んものと働いたが皆な駄目、こゝに